

令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

子ども虐待による死亡事例検証結果を用いた研修に関する調査研究 事業報告書

令和３年３月

PwC コンサルティング合同会社

要旨

【事業の目的】

子ども虐待死亡事例の検証結果を日々のソーシャルワークに反映させるため、子ども虐待死亡事例検証報告書を教材とした研修を開発することを目的とした。また、死亡事例検証を経験していない自治体でも研修を実施できるよう、本事業のワークフローを整理し、公開することも目的とした。

【研究方法】

調査フィールドとなる地方自治体が認識しているソーシャルワークの課題を把握するためヒアリングを実施した。把握された課題に沿った研修テーマを設定した後、同様の課題認識から提言がなされたと考えられる検証報告書を、研修で扱う「題材事例」として選定した。題材事例にあわせて作成した研修カリキュラムを基に、モデル研修を1回開催した。モデル研修実施後は受講者アンケートの集計及び委員会での振り返りを行い、改善点や今後の展開に向けた検討を行った。

【研究結果】

調査フィールドとした地方自治体において児童福祉、母子保健、生活保護、障害福祉等の担当部署から申し込みを受け、モデル研修を開催した。研修は、題材事例を基に、受講者同士が事例の見立て等についてディスカッションを行った後で、講師がフィードバックする形式で実施した。研修後、アンケートにて「自分や同僚が行っている日ごろのソーシャルワークの強みや改善点に気があったか」を尋ねた結果、5段階中「大いにあった」を含む上位2項目が70%を超える結果となった。他方、ディスカッションの時間については「短い」とする回答が多く見られ、改善点と考えられた。この結果を踏まえ、時間配分を再検討した研修カリキュラム例を考案した。

【考察】

研修を企画運営する際のポイントについて整理した。

「想定受講者を検討する際の留意点」について、モデル研修では複数の部署から多職種が受講した結果、部署や職種ごとに業務の進め方や視点が違うことに気があったと挙げられた。子ども虐待防止対策に関わる可能性のある部署から多職種が広く研修に参加することは、組織内の部署間理解の促進や連携強化の観点から有効と考えられる。

「研修教材をどのように作成するか」について、受講者の精神的負荷を考慮し、研修を行う自治体にて過去発生した事例は避けるべきであると挙げられた。題材事例を選定する方法について、研修テーマに沿ったキーワードを予め設定した上で、検証報告書を目視で確認していくことが考えられる。教材とする事例を現実的な内容とするため、作成者や監修者としてソーシャルワークの経験を豊富に持つ人物の協力を得ることが必要である。児童相談所職員向けに日ごろの取組を振り返ることを目的として研修を行う際は、モデル研修の題材事例を児童相談所が関わった事例に変更することが必要と考えられる。他方、児童相談所職員が受講する場合でも、モデル研修のように児童相談所が関わっていない事例を用いて「児童相談所がどう市区町村を支援できるか」等を考える視点で研修を行うことも市区町村と協働する上で意義があると挙げられた。

「講師を誰が務めるか」について、ハイリスク事案をより多く取扱った経験を有しており、かつ技術的指導を行う立場である児童相談所のスーパーバイザー級の職責を経験した人物等が講師として望ましい。加えて、日常的に受講者と関わる立場の人では指摘しにくい改善点があった際、必要に応じて躊躇なく指摘できるよう、受講者と異なる組織に所属する人物であるとより良い。複数人が講師としてチームを組んで研修に臨めると、複数の視点からフィードバックができることや講師の負担が軽減できることから一層良いと考えられる。

目次

要旨.....	i
1 本事業の背景、目的.....	1
1.1 本事業の実施背景.....	1
1.2 本事業の目的.....	1
2 事業概要.....	2
2.1 有識者による事業検討委員会の開催.....	2
2.2 研修カリキュラムの作成.....	3
2.3 モデル研修の実施.....	4
3 研究結果.....	5
3.1 研修内容の検討.....	5
3.1.1 受講対象者の選定.....	5
3.1.2 研修テーマと実施形式の設定.....	5
3.1.3 研修題材事例の選定と研修用教材の作成.....	7
3.1.4 講師の選定と受講者の募集.....	9
3.1.5 開催方式の検討.....	10
3.2 モデル研修の実施結果.....	11
3.2.1 開催方式.....	11
3.2.2 実施カリキュラム.....	11
3.2.3 受講者アンケート結果.....	16
3.2.4 講師による振り返り.....	21
4 まとめ.....	24
4.1 子ども虐待死亡事例を用いた研修の企画運営フロー.....	24

4.2	本研修を企画運営する際のポイント	26
4.2.1	想定受講者を検討する際の留意点	26
4.2.2	事務局をどの機関が担うか	26
4.2.3	研修教材（スライド・ワークシート）をどのように作成するか.....	28
4.2.4	講師を誰が務めるか	29
4.2.5	研修を実践に活かすための方策	30
4.2.6	オンライン開催とする場合の留意点	31
4.3	研修教材の作成に関して今後期待されること	32
付録1	研修資料.....	33
付録2	受講者アンケート集計結果.....	55

1 本事業の背景、目的

1.1 本事業の実施背景

子ども虐待による死亡事例は毎年 60～70 例ほどが発生または表面化しており、後を絶たない状況にある。こうした子ども虐待による死亡事例の防止は、わが国の児童福祉における最重要課題のひとつといえる。子ども虐待死亡事例を含む重大事例に対しては、児童虐待の防止等に関する法律第 4 条第 5 項により、児童虐待の防止等のために必要な検証を行うことが国及び地方公共団体の責務とされている。しかし、起きてしまった事例を貴重な教訓とし、再発防止に向けた取り組みに生かすためには、「検証」のみならず、検証から得られた取り組むべき課題を福祉の現場に還元する「研修」の実施も重要である。国では、検証結果等が十分生かされるよう、「児童虐待防止対策の抜本的強化について」（平成 31 年 3 月 19 日児童虐待防止対策に関する関係閣僚会議決定）において、検証結果等を活用した実践的な研修をきめ細かく実施することを示している。

一方、虐待による死亡事例が年間 60～70 例ほどであることに対して、地方公共団体は全国に 1,700 か所以上ある。このことから、地方公共団体の中には該当事例が少なく、死亡事例検証結果を踏まえた研修企画の効果的な実施方法に関する知見が蓄積されていないところもあると推察される。死亡事例検証結果を各地域が十分に活用できるよう、地域横断的に共有できる研修モデルを開発することには大きな意味がある。

1.2 本事業の目的

これを踏まえ、本調査研究は、死亡事例の検証結果を日々のソーシャルワークに反映させるための基本的な研修の枠組みを作ることを目적으로して実施する。具体的には、調査フィールドとなる地方自治体の協力を仰ぎ、子ども虐待死亡事例検証報告書を教材として、日々のソーシャルワークをアセスメントのポイントを見逃さずに対応できているか等の観点から振り返り、改善すべき点を検討する機会となる研修を開発する。また、死亡事例検証を経験していない自治体でも研修に活かすことが可能となるよう、本事業のワークフローを整理し公開する。

2 事業概要

本事業は、前述の目的を実現するために、以下の事業を実施した。各事業の実施結果を基に本報告書を作成した。

2.1 有識者による事業検討委員会の開催

本事業を円滑に進めるため、児童相談所所長経験者や児童福祉分野の学識経験者などで構成する以下の事業検討委員会（以下、「委員会」という。）を5回開催した。新型コロナウイルス感染拡大状況を踏まえ、委員会は原則オンライン開催とした。オンライン会議では司会進行役が安定して接続できることが円滑な進行に資することから、委員会には座長を置かず、事務局を務める PwC コンサルティングが司会進行を務めた。また、厚生労働省子ども家庭局よりオブザーバーを招いた。委員会等構成員および委員会の開催状況等は表1～4の通りである。

表1 委員会委員（五十音順、敬称略）

氏名	所属
相澤 仁	大分大学 福祉健康科学部 教授
佐藤 真由美	青森県健康福祉部 こどもみらい課 子育て支援グループ 主幹
鈴木 聡	元三重県児童相談センター センター長
中垣 真通	子どもの虹情報研修センター 研修部長
宮下 宗一郎	むつ市 市長
和仁 里香	西日本こども研修センターあかし 研修企画専門員

表2 委員会オブザーバー（順不同、敬称略）

氏名	所属
二ノ宮 隆矢	厚生労働省子ども家庭局 家庭福祉課 虐待防止対策推進室 室長補佐
中森 愛	厚生労働省子ども家庭局 家庭福祉課 虐待防止対策推進室 保健指導専門官
青山 祐子	厚生労働省子ども家庭局 家庭福祉課 虐待防止対策推進室 主査
菅原 典子	むつ市 子どもみらい部 部長

表 3 委員会事務局

	所属
東海林 崇	PwC コンサルティング合同会社 公共事業部 シニアマネージャー
古屋 智子	PwC コンサルティング合同会社 公共事業部 マネージャー
一二三 達哉	PwC コンサルティング合同会社 公共事業部 シニアアソシエイト
植木 佳織	PwC コンサルティング合同会社 公共事業部 シニアアソシエイト
清水 式子	PwC コンサルティング合同会社 公共事業部

表 4 委員会開催状況

開催回	内容
第 1 回 2020 年 10 月 1 日	・ 事業概要説明 ・ 研修要領、カリキュラム検討 ・ ヒアリング調査設計 ・ 題材事例検討
第 2 回 2020 年 10 月 20 日 (メールによる持ち 回り開催)	・ 研修カリキュラム検討 ・ 講師検討 ・ 題材事例選定 ・ ヒアリング調査設計
第 3 回 2020 年 12 月 17 日	・ 研修カリキュラム、スライド検討 ・ アンケート内容検討 ・ 当日運営までのスケジュール確認
第 4 回 2021 年 2 月 9 日	・ モデル研修の振り返り ・ 事業報告書章立て案の検討
第 5 回 2021 年 3 月 10 日	・ 事業報告書素案検討

2.2 研修カリキュラムの作成

子ども虐待による死亡事例検証報告書を用いて、日々のソーシャルワークに活かせる実践的な研修カリキュラムを作成した。カリキュラム作成に当たっては、調査フィールドとなる地方自治体が認識しているソーシャルワークの課題に沿った研修テーマを設定した上で、同様の課題認識から提言がなされていると考えられる検証報告書の中から研修で扱う題材事例を選定した。

2.3 モデル研修の実施

作成した研修カリキュラムにより、モデル研修を実施した。モデル研修の結果概要は表5のとおり。研修後は受講者アンケートの集計及び委員会での振り返りを行い、改善点や今後の展開に向けた検討を行った。

表5 モデル研修実施概要

1. 研修受講者	研修協力自治体における児童福祉や母子保健、生活保護等担当部署の受講希望職員
2. 研修日程	令和3年1月25日（月）13時～15時45分（アンケート記入時間含む）
3. 実施形式	講師・事務局：オンライン参加による運営 受講者：自治体会議室に集合し、対面でグループディスカッション
4. 研修の主な流れ	1. はじめに（15分） 事業概要・研修趣旨説明、講師紹介、参加者同士の自己紹介・役割分担 2. 事例紹介（10分） 題材事例の紹介 3. 事例の見立て（30分） ディスカッション：虐待発生のリスクを連想させる事実、事実から考えられること 議論した内容の発表、講師フィードバック 4. ソーシャルワークの分岐点（30分） ディスカッション：重大な結果を防ぐためにいつ、何をすれば良かったか 議論した内容の発表、講師フィードバック （休憩：10分） 5. ソーシャルワークの課題への対応（55分） ディスカッション：課題に対しどんな取組をすると良いか、自分たちはできているか 議論した内容の発表、講師フィードバック 6. 振り返り（10分） 得られた気付きや学びの発表、講師による全体講評

3 研究結果

3.1 研修内容の検討

モデル研修の開催までに検討を行った項目と、その検討内容について以下記載する。

3.1.1 受講対象者の選定

はじめに、モデル研修を受講する対象者の検討を行った。本事業では子ども虐待による死亡事例検証結果を用いた研修を実施することから、死亡事例検証結果からの学びを活かす機会が最も多いと考えられる、自治体で子ども虐待防止に携わる児童福祉及び母子保健担当部署の職員を受講対象者と想定した。

当該部署の中でも、研修で得た学びがケース担当職員への指導等を通じて部署に還元されることをねらい、管理職等の部署における中核的な職員を主な受講対象者と設定した。

研修の到達目標として、死亡事例検証結果を踏まえて、受講する地域で子ども虐待対策が進むよう改善点を見出すことが重要である。その一方で、死亡事例を研修の題材として改善点を見出すことは受講者には大きな精神的負荷がかかる。そのため、研修受講を前向きにとらえてもらえるよう、改善点を把握するのみならず、受講者本人や組織が既に改善を実施したことや、以前から発揮できている「強み」に気が付いてもらうことも研修の重要な目標の一つと考えた。

このことを踏まえ、到達目標は「日々のソーシャルワーク及び研修を実施する自治体における子ども虐待防止対策の『改善点』と『強み』に気が付くこと」と設定した。

3.1.2 研修テーマと実施形式の設定

(1) 研修テーマの設定

受講対象者の選定に続いて、モデル研修で受講者が取り組むテーマの検討を行った。テーマを設定するにあたっては、はじめに受講者が研修で得たい学びや気付きを把握する必要がある。そのため、モデル研修実施協力自治体（以下、「協力自治体」という）における現在の取組や抱えている課題、研修に期待していることを把握するため、ヒアリングを実施した。

ヒアリングは、協力自治体の子ども虐待防止対策の現状や課題を把握しており、かつモデル研修の主な想定受講者にあたる児童福祉関係課の課長に対して実施した。

本ヒアリングの結果、協力自治体では過去に子ども虐待死亡事例が発生しており、その後、当該死亡事例が発生した際の課題意識を基に、部署間の情報共有の強化やアセスメントシートの新規導入などといった、子ども虐待防止の対応体制の強化について取組が進められてい

ることが分かった。一方で、「情報把握や機関間での情報共有を強化したことによりケース数が増加し担当者負担も増えている」等の取組を進めることで新たに見えてきた課題があることも挙げられた。

そこで、本モデル研修では、協力自治体の子ども虐待死亡事例発生時の課題であった「関与時のリスク要因の把握不足」や「関係機関でのアセスメント不足」の改善をテーマとして、当時からの課題で、まだ取組が十分でなく一層の改善が必要な点を、さらなる「改善点」として認識を促すこととした。他方で、既に協力自治体において取組が進められている点については受講者に「強み」と認識してもらえよう促すこととした。

モデル研修では上記テーマについて受講者に考えてもらうため、「関与時のリスク要因の把握不足」や「関係機関でのアセスメント不足」といった課題が類似する、他の自治体で起きた子ども虐待死亡事例を研修題材として用いることとした。

他の自治体で起きた事例を用いることとした理由は、第一に協力自治体で起きた事例を用いることは受講者にとって精神的負荷が極めて高いと考えられたためである。死亡事例及びその検証を経験し、亡くなった子どもの気持ちや支援の課題、事例後の諸対応に直面した当時の担当者やそのことを知る関係者にとって、当該事例を研修で前向きに扱うことは難しいと想像された。また、関係者がいる中では客観的な議論を行うことは極めて難しく、当時の関係者非難につながりかねないことも考慮した。

（２）研修の実施形式の選定

モデル研修の主な想定受講者である自治体の児童福祉や母子保健部署における中核的な職員は、子ども虐待に関して既に一定の知識や経験を有すると考えられた。また、組織の強みや改善点は、講師から指摘を受けて気が付くことも重要であるが、受講者自身が気付くことで今後の業務により活かせると考えられた。

これらを踏まえ、モデル研修では、講師が知識を伝えるより、受講者同士がディスカッションを進めることに、より多くの時間を割いた形式で実施することとした。ディスカッションを通じて、受講者同士が一つのケースについて意見を交換し、チームとして様々な角度からケースを見ることの重要性を確認する機会にもつながる。講師がディスカッションに対してフィードバックを行うことで、あわせて客観的なアドバイスも得られるよう設定した。

上記研修テーマ及び実施形式にて研修を実施することについては、協力自治体及び本事業検討委員会からの合意を得た後、次のステップに進めた。

3.1.3 研修題材事例の選定と研修用教材の作成

(1) 研修題材事例の選定

研修テーマや実施形式を決定した後、研修においてディスカッションの対象となる題材事例の選定を行った。はじめに、協力自治体で過去に起きた死亡事例のリスク要因や自治体側の課題について整理を行った。その上で国の「虐待・思春期問題情報研修センター」事業を実施する「子どもの虹情報研修センター」（運営法人：社会福祉法人横浜博萌会）の Web サイト¹において公表されている子ども虐待死亡事例等の検証報告書の中から、リスク要因や課題が類似する事例を抽出する作業を行った。抽出時に用いたキーワードの例は表 6 の通りである。これらのキーワードが含まれる事例は、研修テーマに沿う要素を持つと考えられた。

表 6 事例抽出時のキーワード例

1. 事例の持つ属性
予期せぬ妊娠、特定妊婦、若年妊娠、ひとり親、転居 等
2. 検証事例報告書で挙げられた課題
・関与時のニーズ把握
・関係機関でのリスクアセスメント不足
・転出によるリスク増加の検討不足 等
3. 検証報告書でなされた提言
・状況変化（転居、家族構成、家庭環境）後のリスクアセスメント
・支援ニーズ把握 等

直近 3 年間で公表された約 40 事例の検証報告書に対して上記抽出作業を行ったところ、該当する一定数の検証報告書が見つけられた。

その後、抽出した事例のリスク要因や、検証報告書で指摘された行政の対応の課題を事例ごとに比較できるよう表形式に整理した上で、特にモデル研修でテーマとする「関与時のリスク要因の把握不足」や「関係機関でのアセスメント不足」の点で類似性が高いと考えられる事例を絞り込み、研修題材事例の候補として委員会に提示した。

委員会では、本モデル研修でテーマとする上記 2 点が題材事例候補の主要な課題となっているかという観点で検討が行われた。もし事例における主要な課題が異なるものである場合、受講者が実施するディスカッションの焦点が本研修で扱いたいテーマとは別の課題となり、研修の目的に合致しない可能性があるためである。例えば、家庭の訪問拒否によって全くつ

¹ <http://www.crc-japan.net/contents/verification/index.html>

ながりを持つことができなかった事例では、訪問拒否が主要な課題であるため、アセスメント不足をどう解消するかという点より、まず家庭訪問をいかに受け入れてもらうかといった点について議論が集中する恐れがある。

上記観点から委員会にて検討を行い、委員会及び協力自治体の合意を得て研修題材とする事例を決定した。

（２）研修題材事例が発生した自治体に対するヒアリングの検討

研修題材事例の決定に続いて、研修題材事例が発生した自治体に対するヒアリングを検討した。本ヒアリングにより研修題材事例があった自治体で実施された「関与時のリスク要因の把握不足」や「関係機関でのアセスメント不足」といった課題への改善の取組や、改善の取組を進める中で新たに生じた課題及びその課題解決に向けての取組をモデル研修において共有することで、協力自治体の今後の取組の参考になることを期待したものである。

ただし、最終的にヒアリング候補先との日程調整が困難であったためヒアリングは実施しなかった。ヒアリングは行わなかったものの、次に示すとおり、研修題材事例の検証報告書を参照しながら、テーマに沿った独自のシナリオを作成することにより研修効果を一層高めることとした。

（３）研修用教材の作成

検証報告書はプライバシーへの配慮等から成育歴等の詳細な情報が多くないものもある。モデル研修の題材事例とした検証報告書も、事例検討を行うには情報が十分でない部分があった。そのため、検証報告書に記載された内容を基として、本研修で取り扱うテーマに沿った事例を作成した。また、テーマに合わせて受講者に考えてもらいたい点について問いを設定した。

具体的には、事務局が中心となり、事業検討委員及び協力自治体の助言を得ながら、登場人物の背景、虐待が発生する前後の経緯、ジェノグラム、エコマップ等の事例作成及び設問の設定を行った。子ども虐待防止対策を日ごろ行っている受講者から見て、事例の登場人物や経緯に違和感があるとディスカッションに集中できなくなってしまうことが懸念されたため、複数回にわたり内容の調整を行った。設問についても、受講者が検討しやすい流れや検討時間に対する設問数等の観点から助言を得て設定した。

（４）研修プログラムの作成

本モデル研修でテーマとする「関与時のリスク要因の把握不足」や「関係機関でのアセスメント不足」に対する協力自治体における現在の取組状況の気付きを促し、よりの確なアセスメントが行えることを考慮してプログラムを検討した。研修プログラムのねらいや実施内容については、「3.2 モデル研修の実施結果」にて後述する。モデル研修を実施するにあたり、協力自治体の負担を考慮し、研修開催回数は１回とした。

3.1.4 講師の選定と受講者の募集

（１）講師の選定

研修講師には、受講者がテーマに沿ったディスカッションができるよう進行する役割と、ソーシャルワーク実務について技術的助言を与える役割が期待される。そのため、これらの役割を務めた経験を持っていると思われる、以下いずれかの経験を有する人物を講師として想定した。

- ・ 子ども虐待防止対策に係る研修専門機関等に所属し、専門的な研修を企画・実施した経験
- ・ 大学教授等の児童福祉に係る学識経験
- ・ 児童相談所の児童福祉司スーパーバイザー相当の職責経験

モデル研修では、事業検討委員の中から上記のいずれかの経験を有する委員に主たる講師として就任を依頼した。また、受講者に対して複数の観点からフィードバックがなされると有益であるとの委員意見があったことを踏まえ、児童福祉に係る有識者である他の事業検討委員についても、主たる講師の進行に応じて受講者に対してフィードバックを行う「補助的な講師」として、研修への参画を依頼した。

主たる講師とは、研修目的の共有や講師の意図に沿ったカリキュラムの修正等を行うため、講師依頼から研修までに３回の打ち合わせを実施した。各回の打ち合わせ内容は次のとおり。

- ・ １回目：研修の目的、テーマ、想定カリキュラムの共有
- ・ ２回目：作成した研修用教材に対する修正
- ・ ３回目：研修時資料及び当日進行の確認

（２）受講者の募集

受講者の募集は、協力自治体の児童福祉担当部署を通じて行った。受講者定員は、グループディスカッション中心という形式や会場の規模から、１グループあたり５人程度、最大６グループという条件で最大３０名と想定した。当初に主な受講者として想定した児童福祉及び母子保健担当部署に加えて、子ども虐待対応に関係する部署へも広く受講者が募集された。その結果、児童福祉、母子保健担当部署のほか、生活保護や障害福祉の担当部署などから３０名弱の申し込みがあった。

申込を受け、グループディスカッション時のグループ編成を行った。各グループで多職種・多部署による議論が可能となることを考慮し、受講者の担当業務や職種、職階に大きな偏りがないよう編成した。

受講者に対しては、研修カリキュラムで設定した時間内に議論が深められるよう、モデル研修で使用する資料のうち「題材事例紹介」に該当する箇所について研修までの事前読み込みを依頼した。用意した題材事例は、研修時間内に内容を把握するには情報量が多いと考えられたことがその理由である。

また、受講者の一部は児童福祉行政に必ずしも精通しておらず、題材事例に登場する「要保護児童対策地域協議会」といった子ども虐待防止に係る制度の理解が十分でないことが見込まれた。そのため、児童福祉担当部署から各受講者に対して事前に簡単な用語の解説を行ってもらい、受講者が題材事例を理解した上で臨んでもらえるよう配慮した。

3.1.5 開催方式の検討

モデル研修は当初、講師及び事務局が協力自治体を訪問し、対面で実施する方式を想定していた。しかし、新型コロナウイルスの感染が拡大している状況から、受講者が安心して参加できることを優先した結果、受講者は社会的距離を空けた上で協力自治体内会議室に集合して参加し、講師及び事務局は各地域から Web 会議システムを用いてオンラインで参加の上、研修を運営する方式とした。

対面方式の研修では、講師及び事務局は会場内の雰囲気を感じ取り、議論が進んでいないグループのサポートや、進行の流れの調整を円滑に行うことができる。その点をオンライン方式でも同等に実施するためには、Web 会議システムを通じて、研修会場のグループディスカッション等の様子が講師及び事務局に十分に伝わるかが課題と考えられた。そのため、ディスカッションする各グループの音声や映像が明瞭にオンライン参加する講師及び事務局に入出力されるか、研修実施までに協力自治体と複数回の確認作業を行った。

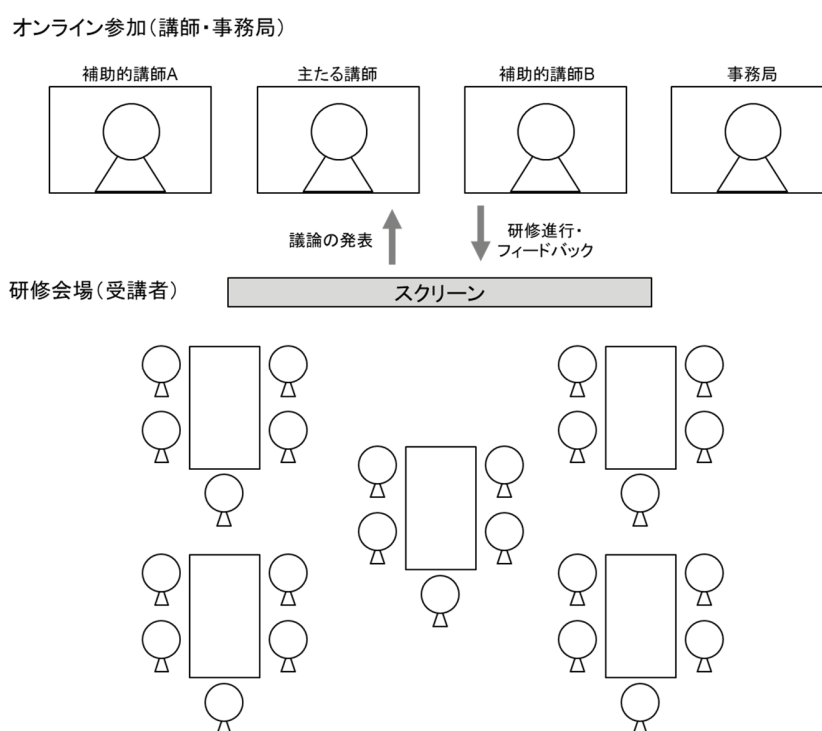
3.2 モデル研修の実施結果

モデル研修の研修次第や受講者アンケート結果、講師からの振り返りについて、以下に示す。

3.2.1 開催方式

本モデル研修は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大という状況を考慮し、図1に示す通り、講師及び事務局がオンラインで運営し、受講者は会場に集合して対面でディスカッションする形式で開催した。

図1 モデル研修の開催方式



3.2.2 実施カリキュラム

モデル研修で使用した資料は付録1を参照されたい。研修は表7で示す通り、はじめに、本調査研究の事業概要や研修趣旨などを事務局より説明した。その後、講師及び参加者同士の自己紹介を経て、研修の主題となる題材事例紹介及び事例検討に移った。

講師による題材事例紹介以後、「6. 振り返り」までは、概ね以下のとおり進行した。

- ① 各セクションの冒頭で講師が受講者に対してセクションの目的や、当該セクションで受講者がやること、ディスカッションに必要な情報を説明する

- ② 講師による説明を受けて、受講者は各セッションで設けられた問いについてグループディスカッションを行う。講師はグループディスカッションの間、マイクを通じて議論の内容を把握する。ディスカッションの際は、限られた時間で有意義な議論ができるよう、配布した大型付箋に気づいたことや疑問点を適宜メモしながら、共有する
- ③ ディスカッションの結果をいくつかのグループが会場と講師に共有する
- ④ 主たる講師と補助的講師は上記③で全体に共有された内容や、ディスカッションの途中に聞かれた内容を踏まえて、フィードバックを行う

表 7 研修次第

セッション	時間	内容	担当
1. はじめに (15 分)	5 分	事業概要・研修趣旨説明 事務局について	事務局
	3 分	講師紹介	事務局
	7 分	受講者同士の自己紹介・役割分担	講師
2. 事例紹介 (10 分)	10 分	題材事例の紹介	講師
3. 事例の見立て (30 分)	20 分	【検討】事例の見立て	受講者
	5 分	会場への共有	受講者
	5 分	講師からのフィードバック	講師
4. ソーシャルワークの分岐点 (30 分)	20 分	【検討】ソーシャルワークの分岐点	受講者
	5 分	会場への共有	受講者
	5 分	講師からのフィードバック	講師
休憩 (10 分)	10 分	休憩	—
5. ソーシャルワークの課題への対応 (55 分)	5 分	題材事例における「課題」の共有	講師
	25 分	【検討】課題への対応	受講者
	10 分	会場への共有	講師
	15 分	講師からのフィードバック	講師
6. 振り返り (10 分)	5 分	受講者による振り返り	講師、受講者
	5 分	講師による全体講評	講師、受講者
閉会		閉会・アンケート記入 (約 5 分)	事務局

計 2 時間 45 分 (休憩・アンケート記入含む)

研修カリキュラムは、まず研修題材事例について受講者が事例検討を行い、その後で、事例検討において「実施した方が良い」と考えた調査や援助が「自分たちの組織では実際に出来ているか」という観点から振り返るという順序で構成した。この振り返りを通じて、最終的に受講者が既に出来ていること（強み）や取組が不十分なこと（改善点）に気が付くことを目的としている。研修の各セッションの内容やねらいを以下に示す。

【1. はじめに】

アイスブレイクとして、講師や受講者同士が自己紹介を行う。事務局で用意した「自己紹介ワークシート」には自己紹介のための項目を6つ示しており、受講者は1分間で各項目を記入する。その後、記入した項目から1つを選択してグループ内で話す。その際、話しやすい項目と話しにくい項目があると体験することを通じて、支援者が相談者の個人的な話を聴取する際に配慮が必要なこともあると講師が伝える導入とすることができる。モデル研修では、所属や役職以外の個人的な情報が活発に話され、アイスブレイクとしての効果が高いと思われた。

自己紹介後はグループディスカッションの際のリーダーや書記といった役割を決め、ディスカッションが円滑に進むように準備を行う。

【2. 事例紹介】

講師が研修題材となる事例を紹介する。具体的には、登場人物、人物ごとにわかっている成育歴、ジェノグラム、事案の経過について説明する。

なお、題材事例は情報量が多く、本セッションの時間のみでは把握が難しいと考えられたため、モデル研修に先立って題材事例の内容は受講者に事前に配布し、読んでもらえるよう依頼した。

【3. 事例の見立て】

事例紹介で把握した内容を基に、受講者は事例で見られた「虐待発生のリスクを連想させる事実」と「連想されるリスクの内容」について、援助者の立場からグループで検討する。検討の例は「未成年で出産をしている。そのため子育ての知識がまだ十分でない可能性が考えられる」といったものである。この検討に正解はなく、所属、職種、経験が異なる受講者ができるだけ多く考えを挙げて、見立ての可能性を広げることをねらいとしている。ステレオタイプの見立てにならないよう、各受講者が事例において「気になる事実」を多く発言し、

様々なリスクの可能性を検討することが重要である。このように支援者同士が議論することを通じて、支援のネットワークを構築することが死亡事例の予防につながると気が付くことがポイントである。

事例で考えられるリスクを多く挙げることで、リスクに対して行うべき援助も広い視野で検討することが可能となる。本セクションでの議論を踏まえ、次のセクションにおいて「子ども虐待を防ぐために事例ではどのような援助をするべきだったか」について検討する。

また、ソーシャルワークを進める上では「どのような情報が足りないか」を認識することも重要との委員意見を踏まえ、「虐待発生リスクを把握するために情報が不足している点」もグループでの検討事項としている。

【4. ソーシャルワークの分岐点】

セクション冒頭、講師から「2. 事例紹介」後の題材事例の帰結として、子どもに重大な結果が起こることを示す。その後で、重大な結果を防ぐポイントを学ぶため、ソーシャルワークの方針を切り替えるべきだったと考えられる「ソーシャルワークの分岐点」がいつだったかについて受講者に検討してもらう。受講者は「いつ、何をすれば子どもを助けられたか」「子どもを助けるための援助が事例ではなぜできなかったか」について、検証する立場から、グループで検討を行う。

本セクションでは題材事例におけるソーシャルワークの課題（例：関与時の関係機関のリスク要因把握不足、関係機関のアセスメント不足）が何だったか、受講者に検討してもらうことをねらいとしている。事例における支援の課題は運営側から提示されるよりも、受講者が事例検討を行い、自ら気が付くことが実務に活かす上で重要であるとの委員会での指摘を踏まえて本構成とした。

「3. 事例の見立て」において様々な見立てを行った後で、子どもに重大な結果が起こると示すことで、見立てを行った時点以後、早期から予防的な援助を実施することが重要であったという認識を高めることにもつながると考えられる。

【5. ソーシャルワークの課題への対応】

セクション冒頭、題材事例の基となった検証報告書において、行政対応の課題として指摘された点を講師から示す。この指摘された課題が、受講者に検討してもらいたい本研修のテーマに対応している。検証報告書に記載された課題や提言は、様々な観点から検討されているため、その指摘を参考に現在の援助のあり方を客観的に振り返るとともに、今後の取組の検討につなげることをねらいとする。

具体的には、受講者は「検証報告書で挙げられた課題に対し、どのような取組をすると良いか」を検討し、その後「自分たちはその取組が実践できているか」「まだ実践できておらず改善できると良いことは何か」について、グループで議論する。この議論を通じて、受講者が既に持っている「強み」や今後の「改善点」に気が付くことを目的に実施する。

【6. 振り返り】

受講者は研修全体を振り返り、得られた学びや気づきを全体に共有する。その後、各セッションで実施した講師フィードバックに加えて、改めて全体講評として講師全員からフィードバックを行う。

本研修は死亡事例を扱い、かつ議論も複数回あるなど負荷がかかる研修であることから、講師はフィードバックの際、受講者が緊張を解いて前向きな気持ちで研修を終えられるよう配慮する。また、直近に子ども虐待の重大事例が発生していた場合には、講師が受講者に対して労いや共感を示すことがケアの観点から重要と委員から指摘されている。前向きな気持ちになることや労いによって、受講者に社会的意義のある職務を遂行していることを再認識してもらい、子どもの最善の利益に資する行動につなげる意欲を醸成する。

モデル研修では研修の終了時、受講者のストレスが和らぐよう、講師がポジティブなイメージを口頭で伝えながら深呼吸を促すリラクゼーションを行った。

3.2.3 受講者アンケート結果

モデル研修の受講者アンケート集計結果を一部抜粋して、以下に示す。アンケート集計結果全ては付録2を参照されたい。本モデル研修受講者 26 名に対してアンケート用紙を配布し、全員からアンケート回答を受領した。

受講者の担当業務は表8に示す通り、当初想定受講者とした児童福祉（児童家庭相談・手当支給など）や母子保健のみならず、保育所や生活保護、その他には障害福祉担当も見られるなど、複数部署の参加があった。

表8 受講者の担当業務

	人数	割合
児童福祉（児童家庭相談・手当支給など）	6	23.1%
母子保健（妊婦検診・乳幼児健診・新生児訪問など）	6	23.1%
保育所・幼稚園・認定こども園・放課後児童クラブ	1	3.8%
生活保護・生活困窮者自立支援	9	34.6%
その他	4	15.4%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

モデル研修の各セクションにおいて検討を行う時間の長さについて尋ねたところ、表9から表11に示す通り、いずれのセクションでも検討時間が「短い」に当たる回答と、「ちょうど良い」に当たる回答がほぼ半数という結果となった。

表9 「3. 事例の見立て」の検討時間

	回答数	割合
1. とても短い	4	15.4%
2.	9	34.6%
3.	13	50.0%
4.	0	0.0%
5. とても長い	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

表 10 「4. ソーシャルワークの分岐点」の検討時間

	回答数	割合
1. とても短い	1	3.8%
2.	12	46.2%
3.	13	50.0%
4.	0	0.0%
5. とても長い	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

表 11 「5. ソーシャルワークの課題への対応」の検討時間

	回答数	割合
1. とても短い	1	3.8%
2.	8	30.8%
3.	15	57.7%
4.	0	0.0%
5. とても長い	0	0.0%
無回答	2	7.7%
回答計	26	100.0%

本モデル研修はアンケート記入時間を含めると全体で約 2 時間 45 分であった。この研修全体の長さについて尋ねたところ、表 12 に示す通り「ちょうど良い」に当たる回答（76.9%）が最も多く、次に「長い」に当たる回答（19.2%）が多い結果となった。前述の通り、各セッションの検討時間は短いと感じた受講者が多かったものの、研修全体の長さについては概ね良いとした受講者が多い点は特徴的といえる。各セッションの検討時間の配分には検討の余地があるといえる。

表 12 研修全体の時間

	回答数	割合
1. とても短い	1	3.8%
2.	0	0.0%
3.	20	76.9%
4.	5	19.2%
5. とても長い	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

研修前と比べて、子ども虐待事例に必要な援助や、援助する上で課題になる点を考える力が向上したと思うかについて尋ねたところ、表 13 に示す通り、「とてもそう思う」（19.2%）、「そう思う」に当たる回答（65.4%）が合わせて 80%以上を占めた。

表 13 援助や援助する際の課題を考える力の向上があったか

	回答数	割合
1. とてもそう思う	5	19.2%
2.	17	65.4%
3.	2	7.7%
4.	2	7.7%
5. 全くそう思わない	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

モデル研修では「日々のソーシャルワーク及び研修を実施する自治体で実施している子ども虐待防止対策の『強み』と『改善点』に気が付くこと」を到達目標として設定した。この到達目標の達成度合いを検証するため、「自分や同僚が行っている日ごろのソーシャルワークの強みや改善点に気が付きがあったか」を尋ねた結果が表 14 である。「大いにあった」（19.2%）を含む上位 2 項目の回答割合が 70%を超えることから、受講者の 70%以上が強みや改善点に関する気が付きを得られたといえる。気が付いた強みや改善点について自由記入で回答を求めたところ、「関係機関と連携して支援する体制があることが強み」、「最新の情報の共有や、スピーディーな対応をすることは改善点」といった回答があった。

表 14 強みや改善点に対する気が付きがあったか

	回答数	割合
1. 大いにあった	5	19.2%
2.	14	53.8%
3.	5	19.2%
4.	1	3.8%
5. 全くなかった	1	3.8%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

モデル研修のカリキュラム構成について、「議論する内容のわかりやすさ」「議論の深まりやすさ」について尋ねたところ、表15と表16に示す通り、いずれも「良い」が最も多く、次に「どちらともいえない」、「とても良い」が続く結果となった。

良かった点や改善点について自由記入で回答を求めたところ、「検討する項目が多く、グループワークや考えをまとめる時間が短かった」旨の回答が複数見られた。時間については「資料にある検討時間と実際の検討時間が異なり、参加者が混乱していた」という回答もあった。これは検討時間の前に、講師による一定の説明箇所があったため、資料通りの検討時間をとれなかったセクションがあったことを指している。また「保健師は日々このような状況に対応しているのでイメージしやすかったが、そうでない人はイメージしにくいようだった」という回答があり、職種により議論の取りかかりやすさに差があることが示唆された。

カリキュラムの流れについて特段の指摘がなかったため、カリキュラム構成を大きく変更することは要さないと考えられる。

表 15 研修の構成の満足度（議論する内容のわかりやすさ）

	回答数	割合
1. とても良い	4	15.4%
2. 良い	15	57.7%
3. どちらともいえない	6	23.1%
4. 悪い	1	3.8%
5. とても悪い	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

表 16 研修の構成の満足度（議論の深まりやすさ）

	回答数	割合
1. とても良い	4	15.4%
2. 良い	17	65.4%
3. どちらともいえない	5	19.2%
4. 悪い	0	0.0%
5. とても悪い	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

モデル研修において特に良かった点を尋ねたところ、表 17 の通り、最も多く挙げられたのは「他参加者と交流や意見交換ができた」（76.9%）で、「自分たちが行っているソーシャルワークのあり方を見直すきっかけができた」（50.0%）、「現場で使える実践的な知識や気づきを得られた」（46.2%）が続いた。

表 17 研修において特に良かった点（複数回答）

	回答数	割合
他参加者と交流や意見交換ができた	20	76.9%
自分たちが行っているソーシャルワークのあり方を見直すきっかけができた	13	50.0%
現場で使える実践的な知識や気づきを得られた	12	46.2%
子ども虐待重大事例を検討できた	9	34.6%
講師から自分の意見やソーシャルワークのやり方についてフィードバックが得られた	7	26.9%
その他	0	0.0%
無回答	1	3.8%
回答計	62	

このようなカリキュラムの研修を再度受講したいかについて尋ねたところ、表 18 の通り、「とてもそう思う」（34.6%）を含む上位 2 項目で約 70%を占めた。自由記入欄では「色々な職種の人と同じテーマで話せたのが良かった」といった多部署・多職種での開催の利点や、「全国の人と研修に参加でき、情報交換できる場はとてもありがたい」というオンライン開催の利点が挙げられた。また「1 日使っても良いような気がした」という意見も見られた。

表 18 同様の研修を再度受講したいと思うか

	回答数	割合
1. とてもそう思う	9	34.6%
2.	9	34.6%
3.	6	23.1%
4.	2	7.7%
5. 全くそう思わない	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

3.2.4 講師による振り返り

今後、本研修を実施する際の参考として、モデル研修実施後に事業検討委員から挙げられた主な意見を以下4つのカテゴリにて示す。

① グループディスカッションの時間が不十分であった

受講者が検討する内容を考えると、グループディスカッションの時間が短かったこと、また、設問に対する考えを整理してから意見を出すまでに時間を要していたことが挙げられた。

グループディスカッションでは、グループ内で1つの意見が出た後、その意見の是非について十分な議論がなされないまま次の話題に話が進む傾向が見られた。ディスカッションの時間が短いために、そのような傾向となった可能性がある指摘された。

研修の設問とした「考えられるリスク要因」や「重篤な結果を防ぐために、いつ、何をすれば良かったか」といった点を踏み込んで考えてもらうためには、1人の意見が出た後で、意見に対する意見をグループの中でさらに出し合うことが重要と考えられた。受講者が新たな視点に気付くまで話し合う時間が取れるとより良かったとの意見が挙げられた。

また、グループディスカッションの時間が十分でない、または普段交流がない関係機関からの受講者が多い場合には、検討課題の議論に速やかに取り組めるようにすることが重要と指摘があった。そのために、研修前に題材事例の共有だけでなく、ディスカッションの設問も予め共有しておき、受講者が事前に事例に向き合って課題への回答を作成した上で、研修に臨むことが望ましいとされた。また、ディスカッション前の5分程度を黙読と自分の考えの付箋への書き出しに充て、付箋を使って受講者ごとの視点の違いが見えやすくすることがアイデアとして挙げられた。

他方、検討の時間は単純に長ければ良いわけではなく、受講者に検討してほしい点を端的に説明することで、短時間で進めることも可能であるという指摘もあった。

② 複数部署、多職種のグループ編成による利点と課題

受講者の様子から、部署・職種が混合のグループ編成としたことにより、他部署、他職種の業務の進め方やケースへの視点への理解が深められ、自分とは異なる見方や考え方の気付きがあったようにうかがえた。受講者から「研修に参加した児童福祉や生活保護等の関係各課で情報共有や共通の認識を持つことが必要である」旨の意見も聞かれたため、児童福祉と母子保健に限らず複数部署からの受講者がいたことには意義があったと挙げられた。

一方、複数部署、かつ多職種が参加したことの課題として、児童福祉や母子保健業務の経験がない受講者については、ディスカッションの設問で何を答えたら良いのか要領を得ず、

議論開始までの時間に差が見られたという点が挙げられた。受講者の職種や経験に合わせて回答しやすい設問を立てることや、研修中に設問で検討すべき点を例示するなどしながら分かりやすく伝えた方が良かったと指摘があった。

このほか、子ども虐待対応に普段関わりが少ない受講者には、題材事例で挙げた家族の成育歴や虐待までの経緯といった豊富な情報が当たり前に収集できると考えられたのではないかという指摘がなされた。豊富な情報は、各機関の担当職員が持ち寄り、共有することで初めて得られるものであるため、個々の機関が情報を抱えていては全体像が見えないという点を理解してもらう必要があったとされた。題材事例の情報を受講者ごとに断片的に渡し、グループディスカッションを通じて情報のまとめを行うワークを実施することも一案として挙げられた。

③ オンラインによる運営の利点と課題

オンライン形式で研修が実施できたことで、講師と受講者が遠隔地にいても研修を開催できる可能性が広がったという意見が挙げられた。

一方で、研修会場で進行するディスカッションの音声や、受講者の発表の音声割れて聞こえにくく、設備面での難しさがあった。対面であればグループディスカッションで「どんな話がされているか」を講師がグループを巡回して聞くことができるが、モデル研修では巡回ができないため、講師によるフィードバックはマイクで聞こえた議論とそこから想像できる範囲でのコメントとせざるを得ず難しかったと挙げられた。

研修会場に講師がいれば、偏った視点で議論が進んでいるときにグループに質問を投げかけて、別の視点をもたらすことができるが、それができなかったために講師も受講者グループも進行に苦慮したという意見があった。

④ 見立てに関する問いの立て方と、問いの頻度について

「3. 事例の見立て」の設問は、事実から見える客観的なアセスメントを進める内容となっている。そのことは重要である一方、当事者の大変さや困りごとが何かということに関して設問での言及が少なかった。「保護者や子どもにとって、辛いことや苦しいことが何だと思うか考えてください」といった言葉があることで当事者に寄り添った支援が検討できるとされた。

本研修では、事例の見立てについて議論する機会は1回だったが、題材事例の序盤まで読み進めたところで一度見立てを行ったあと、ストーリーが進行し事例に新たな情報が加わった時点で改めて見立てを行う設問を入れることができると、「どのような関わりをしたこと

で、親子の状況や必要と考えられる支援を把握できるようになったか」といったことを受講者が理解できるようになると挙げられた。²

² 死亡事例検証結果から多角的なアセスメントの重要性を伝えている参考書籍として、委員から以下が挙げられた
ピーター・レーダー、シルヴィア・ダンカン『子どもが虐待で死ぬとき 虐待死亡事例の分析』，2005，明石書店

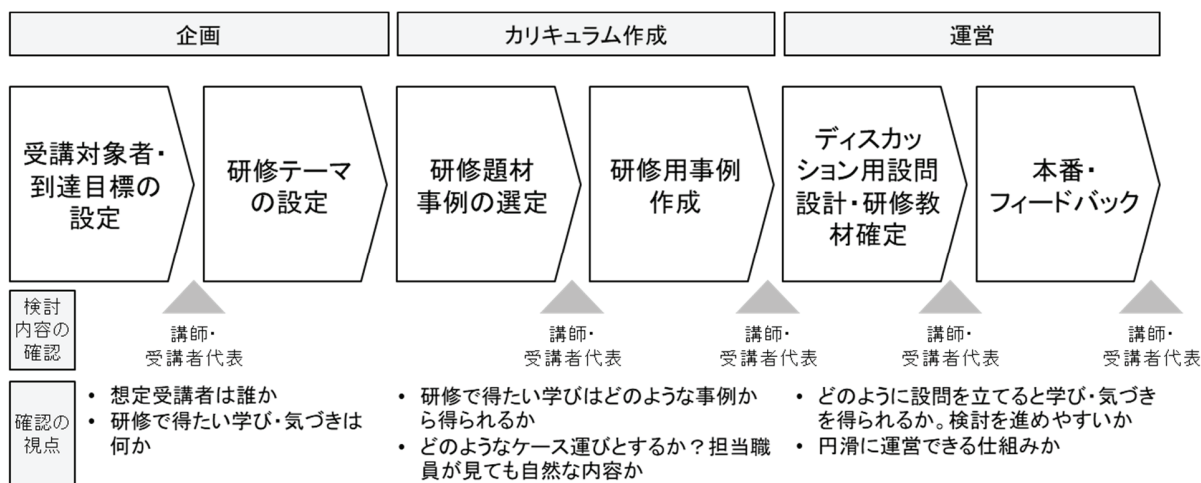
4 まとめ

モデル研修を実施した結果及び委員会を通じて議論されたことを踏まえ、本研究のまとめを以下の通り記載する。

4.1 子ども虐待死亡事例を用いた研修の企画運営フロー

第3章で子ども虐待死亡事例検証報告書を用いた研修の企画から当日運営までの手順とその内容を記載した。これらの企画運営フローをまとめると図2のとおり示すことができる。このフロー図のうち、研修を進める上で重要と考えられる点について次節で示す。

図2 研修企画から研修当日までのフロー



研修カリキュラムについて、検討時間が少ないとするアンケート結果や委員の振り返りを踏まえた時間延長例を表19に示す。まず、カリキュラム全体の流れは、アンケート結果から変更の必要性は高くないと見られたため変更を加えていない。一方、検討時間の不足については多くの指摘があったことを踏まえ、検討時間のみならず研修全体に余裕が持てるよう、各セクションで時間を長く取れるように修正した。検討時間以外の趣旨説明や自己紹介等といった場面で想定より時間がかかったために、研修資料において当初提示していた検討時間を確保できなかったという点を考慮したものである。

実際に本カリキュラムを用いて研修を行う際は、研修目的に応じて時間配分が適宜調整されることが望ましい。例えば、研修目的に「リスクアセスメントの強化」を挙げる場合には、「3. 事例の見立て」の時間を10分延長するといった対応が考えられる。

なお、本修正案は、モデル研修同様にグループディスカッション形式を採用し、各グループが 5 名前後であること、ディスカッション結果の会場発表は 1、2 グループであること、主たる講師のほかに数名の補助的講師がフィードバックに参加することを前提としている。これらの前提条件が異なる場合には、時間の長短の調整が必要である。

本研修次第に沿って実施する場合、事務局は当日午前に会場設営や講師との直前打ち合わせを行い、午後に受講者受付及び本研修を実施するという一日がかりのスケジュールになると考えられる。

表 19 時間延長版研修次第（例）

セッション	時間	内容	担当
1. はじめに (20 分)	5 分	事業概要・研修趣旨説明 事務局について	事務局
	5 分	講師紹介	事務局
	10 分	受講者同士の自己紹介・役割分担	講師
2. 事例紹介 (15 分)	15 分	題材事例の紹介	講師
3. 事例の見立て (50 分)	5 分	セッションの目的説明	講師
	30 分	【検討】事例の見立て	受講者
	8 分	会場への共有	受講者
	7 分	講師からのフィードバック	講師
休憩 (15 分)	15 分	休憩	—
4. ソーシャル ワークの分岐点 (50 分)	5 分	セッションの目的説明	講師
	30 分	【検討】ソーシャルワークの分岐点	受講者
	8 分	会場への共有	受講者
	7 分	講師からのフィードバック	講師
5. ソーシャル ワークの課題への 対応 (50 分)	5 分	題材事例における「課題」の共有	講師
	30 分	【検討】課題への対応	受講者
	8 分	会場への共有	講師
	7 分	講師からのフィードバック	講師
6. 振り返り (20 分)	10 分	受講者による振り返り	講師、受講者
	10 分	講師による全体講評	講師、受講者
閉会		閉会・アンケート記入 (約 5 分)	事務局

計 3 時間 45 分 (休憩・アンケート記入含む)

参加者や事務局の都合により、研修を2日に分割して実施することも検討されうる。2日日程で実施する場合は、1日目は「3. 事例の見立て」までとし、2日目は「4. ソーシャルワークの分岐点」から始めるといった構成例が考えられる。2日日程として、時間に余裕をもって実施できるのであれば、1日目は「3. 事例の見立て」において、「リスク要因の検討」を発展させ、「リスク要因に合わせた援助方針を立てる」ワークを追加することが一案として挙げられる。2日目は「4. ソーシャルワークの分岐点」から開始し、「重大な結果を避けるため、いつどのような援助がなされると良かったか」を考えた上で、1日目に検討した援助方針と対比させることで、当初援助方針の検証ができるような進め方とすることも考えられる。

4.2 本研修を企画運営する際のポイント

本事業で実施した子ども虐待死亡事例検証報告書を用いた研修が広く実施されるよう、研修を企画運営する際のポイントを以下の通り示す。

4.2.1 想定受講者を検討する際の留意点

モデル研修では児童福祉及び母子保健担当部署の職員を受講者と想定したが、生活保護担当部署や障害福祉担当部署からも受講申し込みがあったことを受け、複数の部署から多職種が受講するに至った。その結果、研修でのディスカッションを通じて、部署や職種ごとに業務の進め方やケースに対する視点の違いに気づきがあった様子がアンケートや委員振り返りにして示された。

このことから、子ども虐待防止対策への関りが特に深いと考えられる児童福祉及び母子保健担当部署のみならず、子ども虐待防止対策に関わる可能性がある部署も広く研修に参加することが、組織内の部署間理解の促進や連携強化の観点で有効と見られる。なお、本研修は市区町村を受講対象としたものの、児童相談所や都道府県等で実施する場合にも同様に、多職種・多部署を受講者とすることで相互の理解促進や連携強化に資する研修を実施することができると思われる。

ただし、こうした多職種・多部署の職員が参加する研修では、受講者により経験や知識に差があることを考慮し、事前に子ども虐待防止対策に関する基本的な知識の伝達を行うなどの配慮も必要である。

4.2.2 事務局をどの機関が担うか

「4.1 子ども虐待死亡事例を用いた研修の企画運営フロー」で示したフローに沿って研修の企画運営を進める際、事務局は研修テーマを設定するために、研修の想定受講者が抱えるソーシャルワークの課題や研修に期待する学びを把握することが求められる。このことから、

事務局は研修の想定受講者が多く所属する機関か、または想定受講者が多く所属する機関と連絡調整することにより想定受講者のソーシャルワークにおける課題や研修への期待を把握できる機関に置かれることが望ましい。

本事業で検討した研修を行う際の想定受講者は大きく以下の3通りが考えられる。これら3通りで想定される事務局の設置形式について、以下記載する。

- ① 児童相談所職員（都道府県または児童相談所設置市本庁職員含む）を対象とした研修
- ② 市区町村職員を対象とした研修
- ③ 児童相談所職員と市区町村職員を対象とした研修

①の場合、都道府県もしくは児童相談所設置市本庁の子ども虐待防止対策担当部署または児童相談所に事務局を置くことが想定される。日ごろソーシャルワークで感じている課題や研修に期待する学びを把握しやすいという観点では児童相談所に事務局が置かれることが望ましい。しかし、複数の児童相談所に対して研修を行う場合には、本庁が研修内容の調整に関与した方が良い場合も想定されるため、共同して事務局を置くことも含め実情に応じて決定すべきと考えられる。

②の場合は、ソーシャルワークへの課題意識を持つ市区町村自身が開催する場合と、管内市区町村の技術向上のため、都道府県又は児童相談所設置市が主導する場合とにさらに分けられる。

前者では、当該市区町村内に単独で事務局を置くことが考えられる。このとき、子ども虐待対応の経験が豊富にあり、市区町村のソーシャルワークの課題を第三者の立場から見ることのできる都道府県もしくは児童相談所設置市本庁または児童相談所が事務局に加わることで、適切な研修テーマの設定や事例の選定について、助言が得られる可能性がある。

後者では、都道府県本庁または児童相談所が事務局を務めるが、受講する市区町村の課題意識や研修に対する期待を把握するため、必要に応じ市区町村に事務局への参画を求めることやヒアリングを実施することが望ましい。

③の場合、児童相談所、市区町村双方の課題意識や研修に対する期待を把握した上で研修テーマの設定や題材事例の選定を行っていく必要がある。そのため、都道府県の児童福祉主管課が調整役となり、児童相談所、市区町村の子ども虐待防止対策担当者が顔を合わせて研修テーマの選定等を行う「企画委員会」を共同の事務局として設置することが良いと考えられる。

4.2.3 研修教材（スライド・ワークシート）をどのように作成するか

研修教材を作成する際、研修テーマに沿った題材事例を過去の子ども虐待死亡事例検証報告書から選定する。このとき、想定受講者が所属する機関が過去に関わった事例を取り扱うことは、受講者が精神的苦痛を感じる可能性が高いことから、前向きに受講できる研修とするために避けるべきである。また、取組の改善点について議論する際、他地域で発生した事例を議論の対象とする方が、受講者の心理的負担が少なく発言しやすいという利点もある。これらを勘案し、想定受講者が所属する機関が過去に関わっていない事例を研修題材とすることが望ましい。

過去に発生した子ども虐待死亡事例の検証報告書は、「子どもの虹情報研修センター」が地方自治体の公表年度別に集約し、掲載している Web サイトにて入手が可能である。当該 Web サイトには検証報告書が多数掲載されているため、研修教材を作成するに際しては、研修テーマに沿った検証報告書を抽出することが必要である。この抽出の方法について、モデル研修の題材事例選定において実施した³ように、研修テーマに沿ったキーワード（例：関与時のニーズ把握、関係機関でのリスクアセスメント不足）を予め設定し、そのキーワードが事例における重要な要素として挙げられているか、検証報告書を目視で確認していく方法が考えられる。

この抽出作業は多数の検証報告書を読読する必要がある。委員からは、研修目的に合致した検証報告書を得やすいよう、ひいては子ども虐待防止対策に関わる人が検証報告書に目を通しやすいよう、過去の検証報告書をデータベース化し、各検証報告書に掲載されている事例情報や指摘された課題、提言事項が検索できるようにすることが今後考えられる取組であるとの意見が挙げられた。

上記した地方自治体が作成した検証報告書を用いて題材事例を検討する方法のほか、子ども虐待死亡事例の詳細な情報が掲載されている書籍や、複数の検証報告書の内容を一覧できる書籍を参照して題材事例を検討することも一つの方法と考えられる⁴。

検証報告書はプライバシーへの配慮や公判が進行中であるといった事情から、詳細な事例検討を行う題材事例としてそのまま用いるには情報が十分でないものもある点に留意が必要である。このため、研修教材は、選定した検証報告書を基に、テーマに沿った研修が構成できるよう登場人物の成育歴や虐待前後の経緯等を事務局が作成していくことが必要となる。

³ p. 7 「3.1.3 研修題材事例の選定と研修用教材の作成」を参照

⁴ 委員からは、研修教材を検討する上で参考となり得る書籍の例として以下が挙げられた。（書名五十音順）

- ・石井光太『「鬼畜」の家一わが子を殺す親たち―』，2019，新潮社、
- ・川崎二三彦『虐待死 なぜ起きるのか、どう防ぐか』，2019，岩波書店
- ・川崎二三彦・増沢高編著『日本の児童虐待重大事件 2000―2010』，2014，福村出版
- ・NHK スペシャル「消えた子どもたち」取材班『ルポ 消えた子どもたち 虐待・監禁の深層に迫る』，2015，NHK 出版
- ・杉山春『ルポ 虐待：大阪二児置き去り死事件』，2013，筑摩書房

教材作成にあたっては、受講者が事例を非現実的と感じないように、成育歴や虐待前後の経緯は現実味を帯びた内容とすることが重要となる。そのため、事務局は、研修教材の作成者あるいは監修者として児童相談所や市区町村におけるソーシャルワークの経験を豊富に持つ人物の協力を得ることが必要である。都道府県や市区町村など複数の機関が共同して事務局を置く場合には、各々の意向が反映されるよう、作業部会形式で各機関の担当者が協議しながら教材を作成していく方法も考えられる。

なお、モデル研修では、市区町村職員を受講対象としたため、児童相談所による関わりが見られなかった事例を題材とした。そのため、児童相談所職員向けに日ごろの取組を振り返ることを目的として研修を実施する場合には、児童相談所が関わった事例を題材事例として変更することが必要となる。ディスカッションで受講者が検討する問いについては、モデル研修の内容のままで児童相談所にも妥当すると考えられるが、受講者の経験等に応じて適宜変更した方が良い場合もあると見込まれる。

他方、児童相談所職員が受講する場合でも、モデル研修のように児童相談所が関わっていない事例を用いて「市区町村がどのような点で苦労しているか」「児童相談所がどう市区町村を支援できるか」という点を考える視点で研修を行うことも、児童相談所が市区町村と協働していく上で意義があるという意見が挙げられた。

そのほか、広く複数の部署や関係機関から受講者を募るような研修を行う場合には、受講者ごとの立場によって意見が異なるような題材事例を用いると、お互いの立場を理解でき、新たな学びにつながると考えられる。

4.2.4 講師を誰が務めるか

子ども虐待死亡事例を用いた研修では、講師は、重大な結果につながる可能性がある事案への対応に関して、実践的な技術的助言を受講者に与えることが求められる。また、研修を通じて、受講者が気付いていないソーシャルワークの強みや改善点について気付きを与えることも重要な役割である。加えて、受講者にとっては関係機関での調整等が難しいことを理解した上で、なお子どもの権利保障を最優先し、受講者に改善すべき点があるときには明確に指摘できることも講師には必要であると委員から挙げられている。

これらを勘案すると、まずハイリスク事案をより多く取扱った経験を有しており、かつ技術的指導を行う立場である児童相談所のスーパーバイザー級の職責を経験した人物又はこれと同等の経験がある人物が講師として望ましいと考えられる。加えて、日常的に受講者と関わる立場の人では指摘しにくい改善点があっても、必要に応じて躊躇なく指摘できるよう、受講者と異なる組織に所属する人物であると、より良いと考えられる。

委員会では、複数人が講師チームを組んで研修に臨めると一層良いという意見が挙げられた。講師が1名である場合、講師によるフィードバックは当該講師個人の視点に留まるが、チームで講師を務める場合には、複数の視点からフィードバックができることで、受講者の視野が広がるためである。モデル研修では複数の講師からフィードバックを行う形式で進行したところ、受講者アンケートにおいて「それぞれの講師の経験も踏まえたフィードバックが参考になった」旨の肯定的なコメントが複数挙げられた。

モデル研修のように多くの情報が展開される研修や、オンライン研修の場合には、講師1名で研修の司会進行及びフィードバック全てをこなすのは負担が大きい。進行役に加えて別に講師がいることで、受講者に細やかに目が届くという受講者側の利点と、講師1人あたりの負担が少なくなることで、講師が参画しやすくなるという運営側の利点の両方が得られると考えられる。

なお、モデル研修では、講師によるフィードバックに対して「専門的」「学びにつながった」という声があったほか、受講者同士のディスカッションを通じて「気づきを得られた」という感想が聞かれた。この結果を踏まえると、専門家の視点から助言を与える講師と、議論を通じてケースへの見方の違い等に気づきを与えあえる受講者の両方が、本研修において学びの機会を提供する役割を担っていると見ることができる。「受講者がお互いに講師でもある」という視点を研修実施時に講師や事務局から案内しておくことで、受講者は他の受講者からも学ぶ姿勢で研修に臨むことができると考えられる。

4.2.5 研修を実践に活かすための方策

本事業では研修カリキュラムの検討及び実施までのフローの整理までを事業範囲としたが、研修結果を実践に活かすための有効な手立ての検討が今後の重要な課題であると考えられる。

研修を実践に活かすためには、まず「自分自身がどう変わるか、何を変えるか」を考え、あわせて「組織がどう変わるか」というミクロとマクロの両方の視点から考えることが重要であると委員から指摘があった。

委員会では、実践に活かすための方策として以下3点が挙げられた。これが有効であるかも含め、今後更なる検討が加えられることが期待される。

1つ目は、研修の振り返りの際「本研修で何を学んだか」「学びを業務にどう活かすか」を記載するフォーマットを受講者に配布して記入してもらうことである。記入した内容を会場で発表することや、研修後に上席に報告してもらうことを通じて、実務への反映を促すことができると考えられる。

2つ目は研修の中で見つかった課題を解決するために、「今はないが、あると良い仕組みや体制」を受講者が自由に話し合える時間を研修中または研修後に設けることである。受講者が課題を指摘するのみでなく具体的な解決案を話し合うことによって、実践につなげてもらいやすくなるとされた。

3点目は研修のアンケート集計結果を講師や受講者にフィードバックすることにより、個々のアンケートに記載されたソーシャルワーク等の改善点に組織として気が付いてもらうことである。

4.2.6 オンライン開催とする場合の留意点

オンライン開催とする場合、マイクやカメラなどの機器類の事前確認を十分に行うことは前提であるが、それでも当日、予期せず音声や映像の不調が発生する可能性がある点に留意が必要である。モデル研修でも研修当日に近づけた環境で事前確認を行ったものの、研修当日、受講者のマイクとの距離や研修会場の賑わい音などの影響で音声不明瞭に得られない状態がたびたび発生した。

そのため、少なくとも研修進行を務める講師1名は研修会場を訪問することが望ましい。万が一 Web 会議システムに出力される音声不明瞭でも、会場での進行が可能となるためである。また、必要に応じて講師が受講者の発言を拡声するといった補完的な対応が行いやすくなる。

本モデル研修のように、やむを得ず講師及び事務局全員がオンライン参加する場合にあっては、受講者数名に、設備調整や受講者発言の拡声対応などに柔軟に対応してもらえる「事務局との連絡調整役」を事前に依頼しておくことが重要である。

講師発言に対する受講者の反応に一定のルールを定めておくことも重要と考えられる。講師からは、講師発言に対する受講者の反応がオンラインでは分かりにくいことが研修中の不安要素として挙げられていた。このため、講師発言に対して受講者がどう反応するか、事前に一定のルールを定めておくことで、円滑な進行につなげることができると考えられる。例として、講師からの問いかけに対して○や×のジェスチャーをとることや、講師発言に賛意を示す方法として拍手をすることなどが挙げられる。

モデル研修はオンラインでの開催に課題は見られたものの、受講者からは一定の満足度を得ることができた。このことを踏まえると、オンライン研修で発生する意思疎通や機器調整といった課題に対して適切に準備しておくことができれば、講師や受講者の拠点によらず効果の高い研修を行うことができる可能性があると考えられる。

4.3 研修教材の作成に関して今後期待されること

本事業では、協力自治体におけるソーシャルワークの課題意識や研修に期待する点に準拠した研修教材を作成した。自治体の問題意識に応じた研修を作成することは効果的と考えられる一方、題材事例の選定や研修テーマに沿った教材作成を個別に行う必要があり、一定の労力を要する。

このため、今後、研修を各地域で実施することに鑑みて、各自治体が利用可能な基礎的な研修教材を複数作ることも有益であると考えられる。すなわち、子ども虐待死亡事例において高い頻度で見られる状況に準じた架空の題材事例を作成し、当該事例を基に研修用スライドやグループディスカッションの設問を何通りか作成しておくというものである。担当者が対応に悩む場面や対応を見逃しやすいポイントを事例に含めることで、受講者が基本的な対応を学ぶことができるものとする。題材事例を例示すると「転居で引継ぎがうまくいかなかった事例」「支配関係が強いDV事例」「母親の産後うつ事例」「ステップファミリー内でのしつけと称した虐待事例」などが挙げられる。

あわせて、委員からは講師個人のみの経験に基づいた指導とならないよう、指導者用の資料を作成することの必要性も指摘された。

既に述べたように、運営事務局の設置や教材作成に関して講師や事務局の負担は少なくないという課題がある。その中で、特に時間のかかる研修教材の準備に関して上記のような「ストック」を作ることは、地域での研修の実施ハードルを下げることにつながる。ストックを作り配布することにより、地域での研修が行われやすくなり、子ども虐待対応の専門性向上に寄与することが期待される。

付録 1 研修資料

1-1 投影資料

子ども虐待重大事例検証報告書
を用いた研修

令和2年度
子ども子育て支援推進調査研究事業

PwCコンサルティング合同会社
2021/1/25



1

はじめに

1. はじめに (2)研修趣旨

- この研修は、自治体の方を対象に、支援を考える力の向上や自分たちのソーシャルワークの強みや改善点に気づくことを目的とするものです。
- 本研修は試作段階です。研修の改善に役立てるため、わからないことや、設定でおかしなところがあれば、研修中や研修後のアンケートでぜひお知らせください。

対象

- 地方自治体で子ども虐待に係る部署の方

到達目標

- 日々のご自身のソーシャルワークや、所属する自治体・組織における「強み」と取組の「改善点」に気づくこと
- ケースワークにおいて、子どもや保護者に必要な支援と支援する上での課題を考える力を高める

研修日程

セッション	時刻	時間	内容	担当
1. はじめに	13:00-13:05	5分	事業概要・研修趣旨説明 事務局(PwC)について	PwC
	13:05-13:08	3分	講師紹介	PwC
	13:08-13:15	7分	参加者同士の自己紹介	講師
2. 事例紹介	13:15-13:25	10分	題材事例の紹介	講師
	13:25-13:45	20分	【検討】事例の見立て	参加者の皆様
	13:45-13:50	5分	会場への共有	参加者の皆様
3. 事例の見立て	13:50-13:55	5分	講師からのフィードバック	講師
	13:55-14:15	20分	【検討】ソーシャルワークの分岐点	参加者の皆様
	14:15-14:20	5分	会場への共有	参加者の皆様
4. ソーシャルワークの分岐点	14:20-14:25	5分	講師からのフィードバック	講師
	14:25-14:35	10分	休憩	—
	14:35-14:40	5分	題材事例における「課題」の共有	講師
5. ソーシャルワークの課題への対応	14:40-15:05	25分	【検討】課題への対応	参加者の皆様
	15:05-15:15	10分	会場への共有	講師
	15:15-15:30	15分	講師からのフィードバック	講師
6. 振り返り	15:30-15:35	5分	受講者による振り返り	講師、参加者の皆様
	15:35-15:40	5分	講師による全体講評	講師、参加者の皆様
	閉会	15:40	閉会 アンケートをご記入ください	PwC

1. はじめに (1)事業について

- この研修は、PwCコンサルティング合同会社が、厚生労働省の補助を受けて実施する調査研究の一環として行います。
- 本事業では各自治体が公開している「子ども虐待重大事例検証報告書」を活用した研修の開発を行っています。

目的

- 子ども虐待重大事例検証報告書を教材として、日々のソーシャルワークに当たるうえで心掛けることや改善すべきことを考える研修を作成する
- 地方自治体が次年度以後、本研修を実施できるよう、研修実施までの手順を公開する

事業概要

モデル研修
検討・実施
今日はこれ

→

事業報告書の
作成

1. はじめに (3)事務局(PwC)について

1. はじめに (4) 講師ご紹介



PwC

10

1. はじめに (5) 講師ご紹介



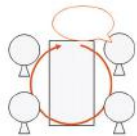
PwC

11

1. はじめに (6) 自己紹介タイム

- 顔見知りが多いと思いますが、普段話す機会が少ない方もテーブルにいます
- この機会に、自己紹介をしましょう
- はじめに、自己紹介カードのうち、書けるところで良いので記入をお願いします【1分】
- 1分経過後、一人1分を持ち時間としてテーブル全員に向け自己紹介をお願いします

一番スクリーンに近い人から時計周りに自己紹介してください



【自己紹介カード項目】

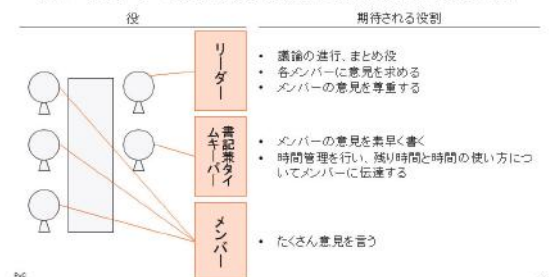
- お名前
- 最近あったいいこと
- 名前の由来
- 好きな食べ物
- 今日の元気度とその理由
- 職場で落ち着くところ
- 研修で期待すること

PwC

9

1. はじめに (7) リーダー・タイムキーパーの選定

- ディスカッションに向け「リーダー」「書記兼タイムキーパー」を決めてください【2分】
- リーダーは、議論をリードし、盛り上げ、メンバーに意見を求めてください
- 書記兼タイムキーパーは議論を筆記して記録するとともに、時間内に議論が終わるよう時間管理をお願いします
- メンバーは、リーダーの進行に協力し、議論が進むよう意見を多く出してください



PwC

12

2 事例紹介

研修日程

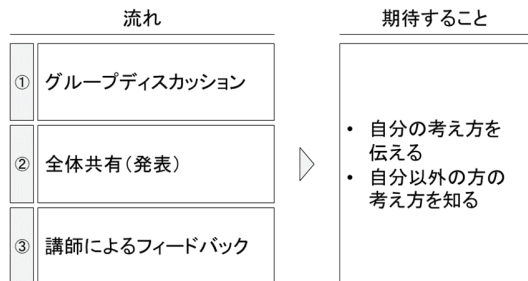
セッション	時刻	時間	内容	担当
1. はじめに	13:00-13:05	5分	事業概要・研修趣旨説明、事務局 (PwC) について	PwC
	13:05-13:08	3分	講師紹介	PwC
	13:08-13:15	7分	参加者同士の自己紹介	講師
2. 事例紹介	13:15-13:25	10分	題材事例の紹介	講師
	13:25-13:45	20分	【検討】事例の見立て	参加者の皆様
3. 事例の見立て	13:45-13:50	5分	会場への共有	参加者の皆様
	13:50-13:55	5分	講師からのフィードバック	講師
	13:55-14:15	20分	【検討】ソーシャルワークの分岐点	参加者の皆様
4. ソーシャルワークの分岐点	14:15-14:20	5分	会場への共有	参加者の皆様
	14:20-14:25	5分	講師からのフィードバック	講師
	14:25-14:35	10分	休憩	—
5. ソーシャルワークの課題への対応	14:35-14:40	5分	題材事例における「課題」の共有	講師
	14:40-15:05	25分	【検討】課題への対応	参加者の皆様
	15:05-15:15	10分	会場への共有	講師
	15:15-15:30	15分	講師からのフィードバック	講師
6. 振り返り	15:30-15:35	5分	受講者による振り返り	講師、参加者の皆様
	15:35-15:40	5分	講師による全体講評	講師、参加者の皆様
閉会	15:40		閉会 アンケートをご記入ください	PwC

PwC

13

本セッション以後の流れ

- 本セッション以後は、架空の子ども虐待事例を用いて、保護者や子どもに対して必要な援助などについて検討していただきます。
- 検討後は、会場に対して考えの共有（発表）をお願いします。

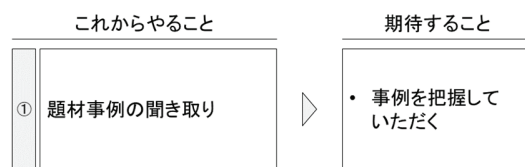


PnC

13

2. 題材事例紹介 (0) 本セッションの目的

- 本セッションでは研修の題材として扱う事例を紹介します。
- 紹介する内容は、紙でも配布しています。研修中、書き込んだり、マーカーを使っていただいても構いません。



PnC

14

2. 題材事例紹介 (1) 登場人物



2. 題材事例紹介 (3) 登場人物の背景



PnC

17

2. 題材事例紹介 (2) 設定

- あなたは、以下部署のうち、「現在の職務」に最も近い部署に所属しているものとします。当てはまるものがなければ、ご経験に近いものを選んでください（あなたが所属する部署を決めたら、部署名に丸をつけておいてください）
- あなたは当該部署で本ケースの担当ワーカー、または母子による制度利用を支援する職員として、実母本人、Y市要対協などから、以後に示す情報を聞いています



あなた



PnC

18

2. 題材事例紹介 (3) 登場人物の背景



PnC

18

2. 題材事例紹介 (3)登場人物の背景



2. 題材事例紹介 (4)ジェノグラム

- ここまでの登場人物の背景を基にしたジェノグラムは以下のとおり



2. 題材事例紹介 (5)事案経過①



2. 題材事例紹介 (5)事案経過②



2. 題材事例紹介 (5)事案経過③



2. 題材事例紹介 (5)事案経過④



2. 題材事例紹介 (5)事案経過⑤



PwC

25

2. 題材事例紹介 (5)事案経過⑥



PwC

26

2. 題材事例紹介 (5)事案経過⑦



PwC

27

2. 題材事例紹介 (5)事案経過⑧



PwC

28

2. 題材事例紹介 (5)事案経過⑨



次セクションではここまで見た内容から事例の見立てを行っていただきます

PwC

29

3

事例の見立て

セッション	時刻	時間	内容	担当
1. はじめに	13:00-13:05	5分	事業概要・研修内容説明、事務局(PwC)について	PwC
	13:05-13:08	3分	開校紹介	PwC
	13:08-13:15	7分	参加者同士の自己紹介	講師
2. 事例紹介	13:15-13:25	10分	講師の事例の紹介	講師
	13:25-13:45	20分	【検討】事例の見立て	参加者の皆様
3. 事例の見立て	13:45-13:50	5分	会場への共有	参加者の皆様
	13:50-13:55	5分	講師からのフィードバック	講師
4. ソーシャルワークの分岐点	13:55-14:15	20分	【検討】ソーシャルワークの分岐点	参加者の皆様
	14:15-14:20	5分	会場への共有	参加者の皆様
	14:20-14:25	5分	講師からのフィードバック	講師
	14:25-14:35	10分	休憩	—
	14:35-14:40	5分	講師の事例における「課題」の共有	講師
5. ソーシャルワークの課題への対応	14:40-15:05	25分	【検討】課題への対応	参加者の皆様
	15:05-15:15	10分	会場への共有	講師
	15:15-15:30	15分	講師からのフィードバック	講師
6. 振り返り	15:30-15:35	5分	受講者による振り返り	講師、参加者の皆様
	15:35-15:40	5分	閉会による全体振り返り	講師、参加者の皆様
閉会	15:40		閉会 アンサーをCに記入下さい	PwC

- ・本セクションでは題材事例の事実整理の上、リスク要因について検討いただきます。
- ・子どもや保護者にとって必要な援助や、援助する上での課題を考える力を高めることを目的としています。

①	事例の事実整理	➡	・ 事実から考えられるリスク要因について考える力を高めていただく
②	リスク要因の検討		

ルール1	「唯一解」を出そうとしない
ルール2	他人の意見を否定しない
ルール3	いいと思ったら「いいね」とその場で言う
ルール4	最後まで聞ききる
ルール5	お互いの認識が合っているか分からない時は、「それは～～ということと合っているか？」と確認し、曖昧に話を進めない

あなた

所属	
事例との関わり	

492

25

[illegible]

3. 事例の見立て (5) 事例検討

20分

- 事例紹介で与えられた情報を基に、次の事項についてグループで考えをまとめてください。【20分】
- 分からない情報は、グループ内で適宜仮定を置いて進めていただいて構いません。

検討すること

- 子ども側のリスク要因
- 保護者・家庭側のリスク要因
 - 虐待発生のリスク要因を連想させる事例の事実と、その事実から考えられることは何でしょうか。ここでは「実母の養育力不足」を連想させる事実を挙げてください
 - リスクを把握するために、紹介した「事案経過」のほかに事実確認した方がよいことは何でしょうか。

PwC

37

3. 事例の見立て (6) 会場共有

- グループで出た話について、「検討すること」の項目にしたがって、会場に対して共有（発表）をお願いします。

検討すること

- 子ども側のリスク要因
- 保護者・家庭側のリスク要因
 - 虐待発生のリスク要因を連想させる事例の事実と、その事実から考えられることは何でしょうか。ここでは「実母の養育力不足」を連想させる事実を挙げてください
 - リスクを把握するために、紹介した「事案経過」のほかに事実確認した方がよいことは何でしょうか。

PwC

38

4

ソーシャルワークの分岐点

4. ソーシャルワークの分岐点 (0) 本セッションの目的

- 前セッションで検討した状況の後、本ケースは残念ながら子どもの死亡という結果を迎えます。
- 本セッションではまずその後の経過を紹介します。その後、死亡に至るまでの経緯を踏まえて「いつ、何をしていたら結果を避けることができたのか」を検討していただきます。

これからやること

① 経緯全体を踏まえて、いつ、何をすれば防ぐことができたかの検討

PwC

41

狙い

必要な援助や援助上の課題を考える力を高めていただく

研修日程

セッション	時刻	時間	内容	担当
1. はじめに	13:00-13:05	5分	事業概要・研修運営説明 事務局(PwC)	PwC
	13:05-13:08	3分	講師紹介	PwC
	13:08-13:15	7分	参加者同士の自己紹介	講師
2. 事例紹介	13:15-13:25	10分	事例事例の紹介	講師
	13:25-13:45	20分	【検討】事例の見立て	参加者の皆様
3. 事例の見立て	13:45-13:50	5分	会場への共有	参加者の皆様
	13:50-13:55	5分	講師からのフィードバック	講師
4. ソーシャルワークの分岐点	13:55-14:15	20分	【検討】ソーシャルワークの分岐点	参加者の皆様
	14:15-14:20	5分	会場への共有	参加者の皆様
	14:20-14:25	5分	講師からのフィードバック	講師
休憩	14:25-14:35	10分	休憩	—
	14:35-14:40	5分	題材事例における「課題」の共有	講師
5. ソーシャルワークの課題への対応	14:40-15:05	25分	【検討】課題への対応	参加者の皆様
	15:05-15:15	10分	会場への共有	講師
	15:15-15:30	15分	講師からのフィードバック	講師
6. 振り返り	15:30-15:35	5分	受講者による振り返り	講師、参加者の皆様
	15:35-15:40	5分	講師による全体講評	講師、参加者の皆様
閉会	15:40		閉会 アンケートをご記入ください	PwC

PwC

42

4. ソーシャルワークの分岐点 (1) 設定

- 前セッションから役を代わります。
- あなたは前セッションと同じ部署にいる、より経験のある先輩職員です。
- この立場から、本ケースを担当した後輩に対し、どう対応するのが良かったのか、振り返りを行っていただきます。どのようなアドバイスが適当でしょうか



あなた

所属	
担当	- 本事例を支援した職員の先輩職員 ※前セッションで自分が検討した内容と一貫性を持たせる必要はありません。第三者としての観点から検討してください
事例との関わり	要対協の検討会議の状況を共有されて知っている

PwC

43

4. ソーシャルワークの分岐点 (2)事例のその後①



P/C

41

4. ソーシャルワークの分岐点 (2)事例のその後②



P/C

42

4. ソーシャルワークの分岐点 (2)後からわかったこと



P/C

43

4. ソーシャルワークの分岐点 (3)事例検討

20分

- これまでに得た情報を基に、次の事項についてグループで考えをまとめてください。
- 分からない情報は、グループ内で適宜想像して、仮定を置いて進めていただいて構いません。

検討すること

1. 死亡という結果を防ぐ取組ができたと思う時点はいつでしょうか。なぜそう思いますか
2. 結果を防ぐためには、事例の中でどの行動（あるいは、なされなかった行動）を、どうすると良かったと思いますか
3. 事例において、できると良かった行動ができなかったのはなぜでしょうか

P/C

44

4. ソーシャルワークの分岐点 (4)会場共有

- グループで出た話について、「検討すること」の項目にしたがって、会場に対して共有（発表）をお願いします。

検討すること

1. 死亡という結果を防ぐ取組ができたと思う時点はいつでしょうか。なぜそう思いますか
2. 結果を防ぐためには、事例の中でどの行動（あるいは、なされなかった行動）を、どうすると良かったと思いますか
3. 事例において、できると良かった行動ができなかったのはなぜでしょうか

P/C

47

休憩

P/C

46

5

ソーシャルワークの 課題への対応

5. SWの課題への対応 (0)本セッションの目的

- これまでのセッションでは援助や援助上の課題を検討いただきました。
- 本セッションでは、架空事例の基となった事例検証報告書において「事例の課題」と指摘されていたことを提示します。
- 皆さんには、その課題を解決するために必要な対応を検討していただきます。
- ここからは**現所属のあなた自身**として、考えてみてください。

これからやること

①	事例における課題解決策の検討
②	課題解決策に対し、自分や組織が取り組んでいるか検討

狙い

・日ごろ、自分たちが行っているソーシャルワークの強み(できていること)、改善点に気づく

5. SWの課題への対応 (2)課題への検討

25分

- 課題として挙げられた「保護者の養育力と家庭環境の変化に合わせたリスクアセスメント」について、グループで考えをまとめてください。

検討すること

- 特に「保護者の養育力不足」を把握するために、どのような取組が考えられますか
- 変化に応じたアセスメントを行うには、どのようなタイミングで何(例: ケース検討会議)を行うのが良いでしょうか
- 1と2で考えたことのうち、自分や組織で、既にできていることは何でしょうか
- 1と2で考えたことのうち、まだできていないので改善できると良いことは何でしょうか

研修日程

セッション	時刻	時間	内容	担当
1. はじめに	13:00-13:05	5分	事業概要・研修趣旨説明、事務局(PwC)について	PwC
	13:05-13:08	3分	講師紹介	PwC
	13:08-13:15	7分	参加者同士の自己紹介	講師
2. 事例紹介	13:15-13:25	10分	題材事例の紹介	講師
	13:25-13:45	20分	【検討】事例の見立て	参加者の皆様
	13:45-13:50	5分	会場への共有	参加者の皆様
3. 事例の見立て	13:50-13:55	5分	講師からのフィードバック	講師
	13:55-14:15	20分	【検討】ソーシャルワークの分岐点	参加者の皆様
	14:15-14:20	5分	会場への共有	参加者の皆様
4. ソーシャルワークの分岐点	14:20-14:25	5分	講師からのフィードバック	講師
	14:25-14:35	10分	休憩	—
	14:35-14:40	5分	題材事例における「課題」の共有	講師
5. ソーシャルワークの課題への対応	14:40-15:05	25分	【検討】課題への対応	参加者の皆様
	15:05-15:15	10分	会場への共有	講師
	15:15-15:30	15分	講師からのフィードバック	講師
	15:30-15:35	5分	受講者による振り返り	講師、参加者の皆様
6. 振り返り	15:35-15:40	5分	講師による全体講評	講師、参加者の皆様
	15:40	15分	閉会 アンケートをご記入ください	PwC

5. SWの課題への対応 (1)事例における課題



5. SWの課題への対応 (3)会場共有

- グループで出た話について、「検討すること」の項目にしたがって、会場に対して共有(発表)をお願いします。

検討すること

- 特に「保護者の養育力不足」を把握するために、どのような取組が考えられますか
- 変化に応じたアセスメントを行うには、どのようなタイミングで何(例: ケース検討会議)を行うのが良いでしょうか
- 1と2で考えたことのうち、自分や組織で、既にできていることは何でしょうか
- 1と2で考えたことのうち、まだできていないので改善できると良いことは何でしょうか

5. SWの課題への対応 (4)検証報告書での提言



PwC

51

研修日程

セッション	時刻	時間	内容	担当
1. はじめに	13:00-13:05	5分	事業統括・研修運営説明(事務局(PwC))について	PwC
	13:05-13:08	3分	講師紹介	PwC
	13:08-13:15	7分	参加者同士の自己紹介	講師
2. 事例紹介	13:15-13:25	10分	題材事例の紹介	講師
	13:25-13:45	20分	【検討】事例の見立て	参加者の皆様
	13:45-13:50	5分	会場への共有	参加者の皆様
3. 事例の見立て	13:50-13:55	5分	講師からのフィードバック	講師
	13:55-14:15	20分	【検討】ソーシャルワークの分岐点	参加者の皆様
	14:15-14:20	5分	会場への共有	参加者の皆様
4. ソーシャルワークの分岐点	14:20-14:25	5分	講師からのフィードバック	講師
	14:25-14:35	10分	休憩	—
	14:35-14:40	5分	題材事例における「課題」の共有	講師
5. ソーシャルワークの課題への対応	14:40-15:05	25分	【検討】課題への対応	参加者の皆様
	15:05-15:15	10分	会場への共有	講師
	15:15-15:30	15分	講師からのフィードバック	講師
6. 振り返り	15:30-15:36	6分	受講者による振り返り	講師、参加者の皆様
	15:35-15:40	5分	講師による全体講評	講師、参加者の皆様
閉会	15:40		閉会 アンケートをご記入ください	PwC

PwC

52

6. 振り返り (2)フィードバック

- 本研修の作成に携わった先生から、本日の研修に関するコメントをいただきます。最後に講師からもフィードバックをします



PwC

53

6 振り返り

6. 振り返り (1)会場共有

- 本日はお疲れ様でした。ここまでで事例の検討は終わりです。
- 最後に、本日の研修について、気が付いたことや考えたことの振り返りをします。
- 1〜2分考えていただいたのち(他の人と話していただいても構いません)、会場に対して考えたことを1つ、共有(発表)をお願いします。

振り返り項目

- 他の人と意見交換して気が付いたこと
- 自分や同僚のソーシャルワークについて考えたこと
- 今後取組を変えていきたいこと

このほかにも、考えたことがあればぜひシェアしてください

PwC

54

最後に アンケートのお願い

- 本研修は、今後、各自治体で取組んでいただく「モデル」として実施しました。
- この研修はまだ開発段階です。本研修が「参加して良かった」と思える研修になるよう改善したいので、アンケートで本研修へのご意見、ご感想をお聞かせください。

- アンケートはお手元にございますので退室前にご記入ください。
- 記入したアンケートは机に置いておいてください
- 個人名のご記載は不要です

PwC

55

長時間お疲れ様でした。
ありがとうございました

pxc.com

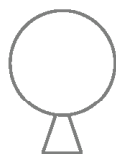
1-2 事例紹介シート

1 登場人物



2 あなたの設定

- ・ あなたは  以下部署のうち、「現在の職務」に最も近い部署に所属しているものとします。当てはまるものがなければ、ご経験に近いものを選んでください

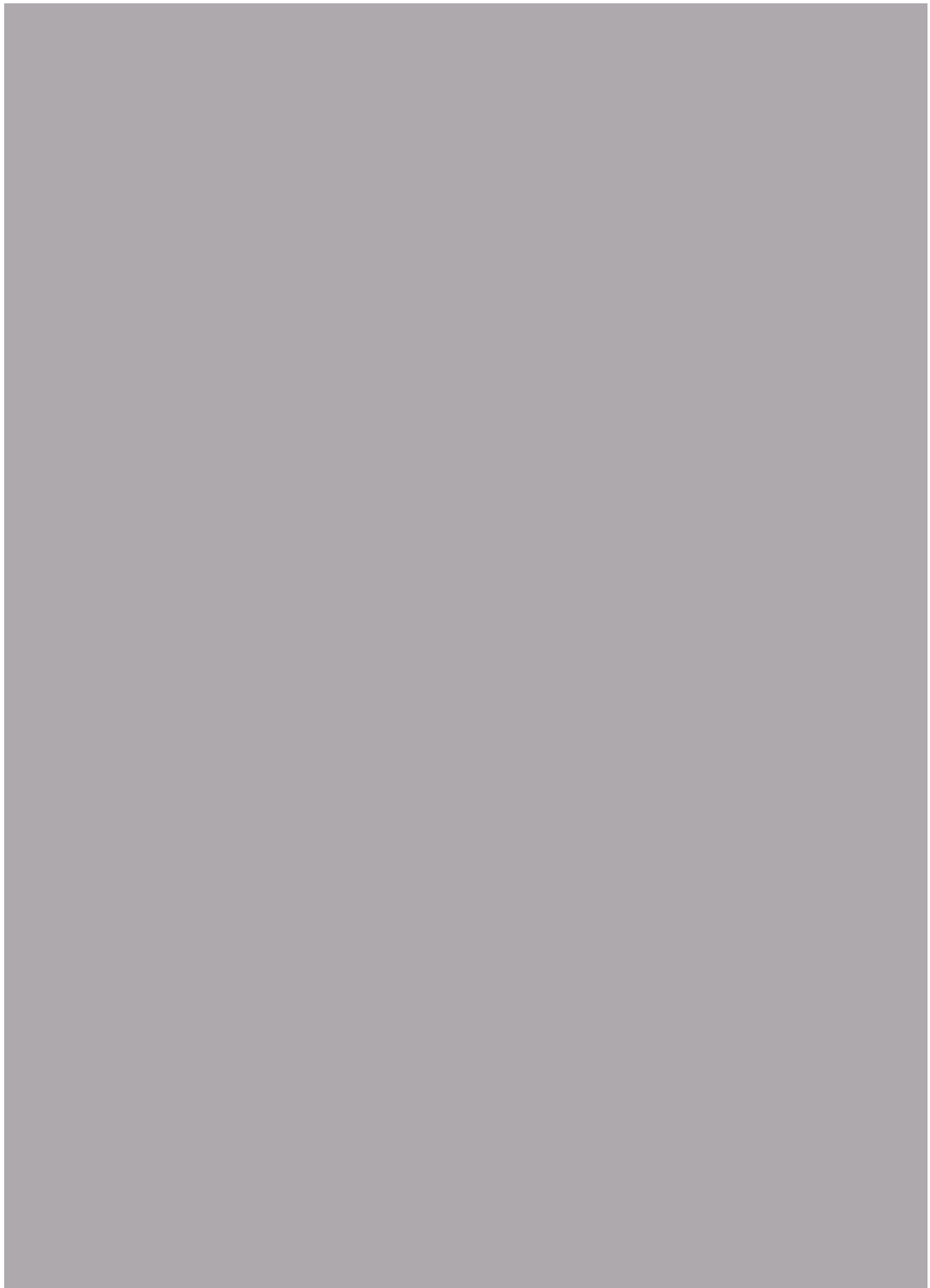


あなた

所属



3 登場人物の背景



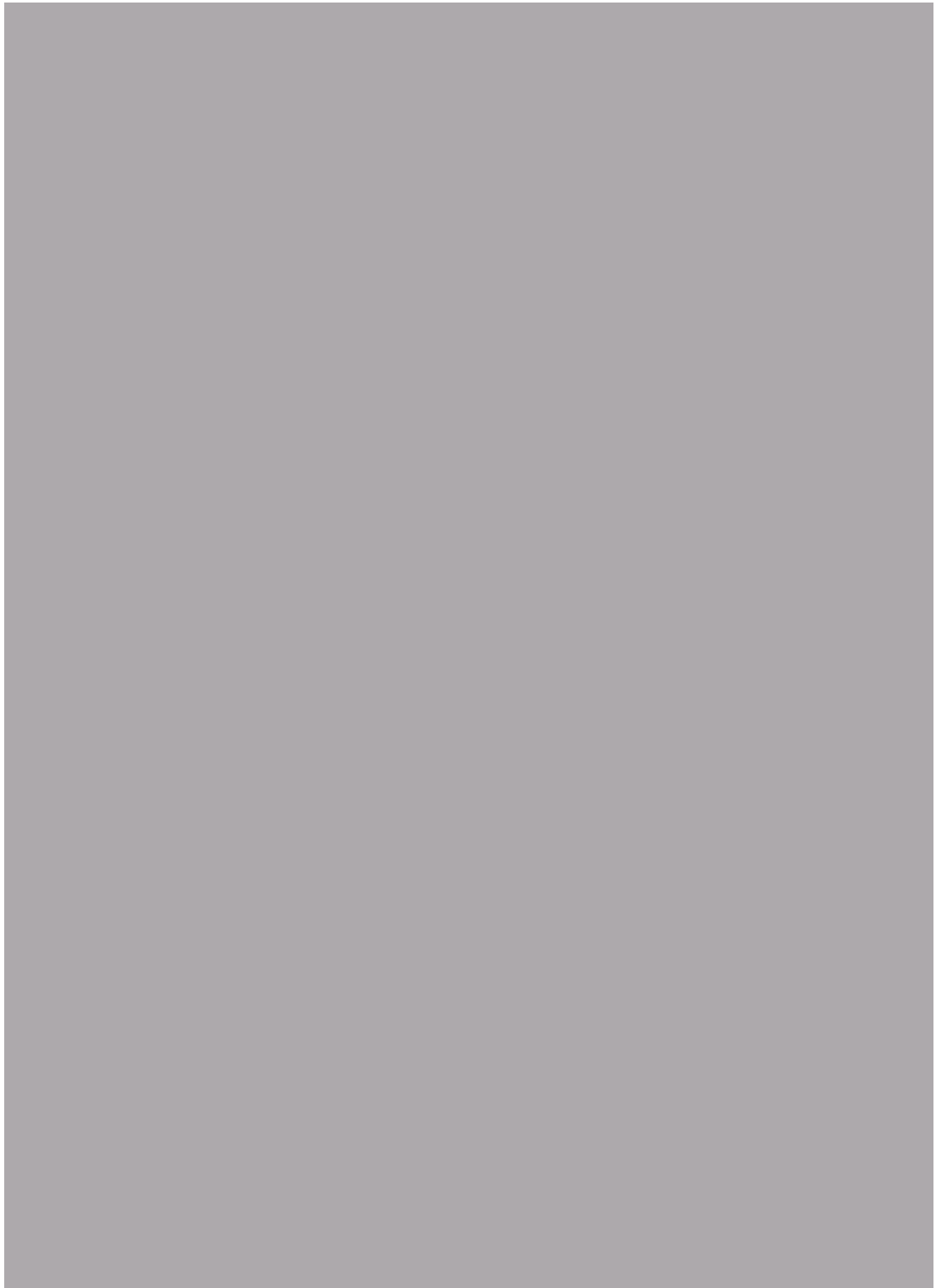
3 登場人物の背景（続き）



4 ジェノグラム（ここまでの情報を基にしたもの）



5 事例の経過



5 事例の経過（続き）



6 ジェノグラム（事例の経過を踏まえて、更新したもの）



1-3 ワークシート

子ども虐待重大事例検証報告書を用いた研修 2021 年 1 月 25 日（月）
自己紹介カード

お名前 _____

最近あったちょっといいこと	名前の由来	好きな食べ物
今日の元気度とその理由	職場で落ち着くところ	研修で期待すること

※全て記載いただく必要はありません。書けるもののみ記載いただければ結構です。研修終了後は破棄します。

子ども虐待重大事例検証報告書を用いた研修 2021 年 1 月 25 日（月）
3 事例の見立て 事例検討ワークシート

	①リスク要因を連想させる事実と、その事実から考えられること	②虐待発生リスクを把握するため、さらに事実確認した方がよいこと
1. 子ども側	【事実】 → 【考えられること】	
2. 保護者・家庭側	【事実】 → 【考えられること】	

子ども虐待重大事例検証報告書を用いた研修 2021年1月25日(月)

4 ソーシャルワークの分岐点 事例検討ワークシート

1. 死亡という結果を防ぐ取組ができたと思う時点はいつでしょうか。事例のどのような事実からそう思いますか	2. 結果を防ぐためには、①事例の中でどの行動(あるいは、なされなかった行動)を、②どうすると良かったと思いますか ①どの行動を(事実) ②どうすると良かったか(推論)	3. 事例において、できると良かった行動ができなかったのは、なぜだと思いますか
---	---	--

子ども虐待重大事例検証報告書を用いた研修 2021年1月25日(月)

5 ソーシャルワークの課題への対応 事例検討ワークシート

1. 特に「保護者の養育力不足」の事実を把握するために、どのような取組が考えられますか ※これまでのワークで考えたことと同じでも構いません ※答えにくい場合は、「3 事例の見立て」で挙げていただいた「2. 保護者・家庭側」のリスク要因に該当する事実を把握するために、どのような取組が考えられるか検討ください	
2. 変化に応じたアセスメントを行うには、どのようなタイミングで何を行うのが良いでしょうか ※同上 ※答えにくい場合は、「4 ソーシャルワークの分岐点」で挙げていただいた「1. 死亡という結果を防ぐ取組ができたと思う時点」をとらえたアセスメントを行うために、いつどんな取組を行えると良いか検討ください。	
3. 1と2で考えたことのうち、自分や組織で既にできていることは何でしょうか	
1で考えたこと	2で考えたこと
4. 1と2で考えたことのうち、まだできていないので改善できると良いことは何でしょうか	
1で考えたこと	2で考えたこと

子ども虐待重大事例検証報告書を用いた研修 2021 年 1 月 25 日（月）

6 振り返りワークシート（メモ用）

- ・他の人と意見交換して気が付いたこと
 - ・自分や同僚のソーシャルワークについて考えたこと
 - ・今後取組を変えていきたいこと
- このほかにも、考えたことがあれば会場にぜひシェアしてください

付録2 受講者アンケート集計結果

問1 担当業務に最も近いものを一つ選んでください。該当する選択肢がない場合は「その他」に担当業務を記入してください

表1 受講者の担当業務

	人数（人）	割合
児童福祉（児童家庭相談・手当支給など）	6	23.1%
母子保健（妊婦検診・乳幼児健診・新生児訪問など）	6	23.1%
保育所・幼稚園・認定こども園・放課後児童クラブ	1	3.8%
生活保護・生活困窮者自立支援	9	34.6%
その他	4	15.4%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問2 「3. 事例の見立て」の検討時間はいかがでしたか

表2 「3. 事例の見立て」の検討時間

	回答数	割合
1. とても短い	4	15.4%
2.	9	34.6%
3.	13	50.0%
4.	0	0.0%
5. とても長い	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問3 「4. ソーシャルワークの分岐点」の検討時間はいかがでしたか

表3 「4. ソーシャルワークの分岐点」の検討時間

	回答数	割合
1. とても短い	1	3.8%
2.	12	46.2%
3.	13	50.0%
4.	0	0.0%
5. とても長い	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問4 「5. ソーシャルワークの課題への対応」の検討時間はいかがでしたか

※当該セクションは2名が不参加

表4 「5. ソーシャルワークの課題への対応」の検討時間

	回答数	割合
1. とても短い	1	3.8%
2.	8	30.8%
3.	15	57.7%
4.	0	0.0%
5. とても長い	0	0.0%
無回答	2	7.7%
回答計	26	100.0%

問5 研修全体の時間はいかがでしたか

表5 研修全体の時間

	回答数	割合
1. とても短い	1	3.8%
2.	0	0.0%
3.	20	76.9%
4.	5	19.2%
5. とても長い	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問6 研修前、本研修に期待していたことは何ですか

表6 研修に期待していた点（複数回答）

	回答数	割合
現場で使える実践的な知識や気付きを得ること	18	69.2%
他参加者と交流や意見交換をすること	14	53.8%
自分たちが行っているソーシャルワークのあり方を見直すこと	13	50.0%
講師から自分の意見やソーシャルワークのやり方についてフィードバックを得ること	13	50.0%
子ども虐待重大事例のケース検討をすること	11	42.3%
子ども虐待重大事例の傾向を知ること	6	23.1%
その他	2	8%
無回答	0	0%
回答計	77	

問 7 研修を通じて知識を新たに得ることができましたか

表 7 研修を通じた知識の習得

	回答数	割合
1. とてもよくできた	6	23.1%
2.	11	42.3%
3.	7	26.9%
4.	2	7.7%
5. 全くできなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問 8 研修前と比べて、子ども虐待事例に必要な援助や、援助する上で課題になる点を考える力が向上したと思いますか

表 8 援助や援助する際の課題を考える力の向上があったか

	回答数	割合
1. とてもそう思う	5	19.2%
2.	17	65.4%
3.	2	7.7%
4.	2	7.7%
5. 全くそう思わない	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問 9-1 新たな気づきや理解の深まりがありましたか

表 9 新たな気づきや理解の深まりの有無

	回答数	割合
1. 大いにあった	7	26.9%
2.	13	50.0%
3.	4	15.4%
4.	2	7.7%
5. 全くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問 9-2 特に、自分または同僚が行っている日ごろのソーシャルワークの強みや改善点について、気づきがありましたか

表 10 強みや改善点に対する気づきがあったか

	回答数	割合
1. 大いにあった	5	19.2%
2.	14	53.8%
3.	5	19.2%
4.	1	3.8%
5. 全くなかった	1	3.8%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問 10 講師の進行・フィードバックはいかがでしたか

表 11 講師の進行・フィードバックの満足度

	回答数	割合
1. とても良かった	12	46.2%
2.	5	19.2%
3.	7	26.9%
4.	2	7.7%
5. とても悪かった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問 11 事務局の運営はいかがでしたか

表 12 事務局の運営の満足度

	回答数	割合
1. とても良かった	12	46.2%
2.	6	23.1%
3.	7	26.9%
4.	1	3.8%
5. とても悪かった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問 12(1) 本研修は「3 事例の見立て（事例の把握・リスク要因の整理）」→「4 ソーシャルワークの分岐点（必要な援助の検討）」→「5 ソーシャルワークの課題への対応（課題への貴自治体での対応）」という構成で議論を進めていただきました。この構成で感じたことについてお聞かせください【議論する内容のわかりやすさ】

表 13 研修の構成（議論する内容のわかりやすさ）

	回答数	割合
1. とても良い	4	15.4%
2. 良い	15	57.7%
3. どちらともいえない	6	23.1%
4. 悪い	1	3.8%
5. とても悪い	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問 12(2) 本研修は「3 事例の見立て（事例の把握・リスク要因の整理）」→「4 ソーシャルワークの分岐点（必要な援助の検討）」→「5 ソーシャルワークの課題への対応（課題への貴自治体での対応）」という構成で議論を進めていただきました。この構成で感じたことについてお聞かせください【議論の深まりやすさ】

表 14 研修の構成（議論の深まりやすさ）

	回答数	割合
1. とても良い	4	15.4%
2. 良い	17	65.4%
3. どちらともいえない	5	19.2%
4. 悪い	0	0.0%
5. とても悪い	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問 13 本研修で特に良かった点をお聞かせください。「その他」がある場合は、その内容を記入してください

表 15 研修において特に良かった点

	回答数	割合
他参加者と交流や意見交換ができた	20	76.9%
自分たちが行っているソーシャルワークのあり方を見直すきっかけができた	13	50.0%
現場で使える実践的な知識や気づきを得られた	12	46.2%
子ども虐待重大事例を検討できた	9	34.6%
講師から自分の意見やソーシャルワークのやり方についてフィードバックが得られた	7	26.9%
その他	0	0.0%
無回答	1	3.8%
回答計	62	

問 14 本研修によって、子ども虐待防止に対する意欲・関心が高まりましたか

表 16 子ども虐待防止に対する意欲・関心の向上度

	回答数	割合
1. 大いに高まった	11	42.3%
2.	10	38.5%
3.	4	15.4%
4.	1	3.8%
5. 全く高まらなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問 15 本研修で話したことや、同僚・講師から聞いたことで、今後に活かそうなことがありましたか

表 17 今後に活かそうなことの有無

	回答数	割合
1. 大いにあった	12	46.2%
2.	8	30.8%
3.	6	23.1%
4.	0	0.0%
5. 全くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

問 16 またこのようなカリキュラムの研修を受けたいと思いますか

表 18 同様の研修を再度受講したいと思うか

	回答数	割合
1. とてもそう思う	9	34.6%
2.	9	34.6%
3.	6	23.1%
4.	2	7.7%
5. 全くそう思わない	0	0.0%
無回答	0	0.0%
回答計	26	100.0%

令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業
子ども虐待による死亡事例検証結果を用いた研修に関する調査研究
事業報告書

発 行 日：令和３年３月

編集・発行：PwC コンサルティング合同会社